

今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市西区大字拾六町所在の遺跡

第 3 集

1973

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

福岡市西区大字拾六町所在の遺跡

第 3 集

序

この報告書は、昭和46年度に実施した一般国道202号線今宿バイパスの路線内の埋蔵文化財の調査記録の一部分であり、『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集・第2集に続くものであります。

発掘調査の記録としては、満足すべきものではありませんが、関係者のご利用に供しうれば幸甚に存じます。なお、調査に際して助力頂いた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご協力により本書を発刊するはこびになりましたので心からの感謝を申し上げます。

昭和48年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田

實

例 言

1. 本書は、昭和46年度に福岡県教育委員会が、九州地方建設局から委託されて実施した一般国道 202 号線今宿バイパス路線内の埋蔵文化財の発掘記録のうちの一部である。

2. 本書の執筆は次のとおりである。

第 1-1	栗原和彦
第 1-2	上野精志
第 2-1・2・4	栗原和彦
第 2-3	上野精志
第 3-1・2・3	上野精志
第 4	栗原和彦

なお、第 2-1 出土遺物の石器の説明は、井沢洋一の執筆による。

3. 掲載写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりである。

4. 本書の編集は、栗原和彦・上野精志が担当した。

本文目次

第1	序説	
1.	はじめに	1
2.	拾六町周辺の遺跡と環境	2
第2	高崎古墳群	
1.	はじめに	7
2.	高崎5号墳	7
3.	高崎6号墳	22
4.	おわりに	22
第3	大又遺跡	
1.	はじめに	27
2.	遺構と遺物	29
3.	結び	44
第4	おわりに	49

図 版 目 次

本文対照頁

図版 1	1	高崎 5 号墳発掘前全景（栗原和彦撮影）	9
	2	高崎 5 号墳の立地する小丘陵（栗原撮影）	9
	2	1 高崎 5 号墳封土と石室（上野精志撮影）	9
	2	高崎 5 号墳封土と石室（栗原撮影）	9
	3	右 高崎 5 号墳遺物の出土状況（栗原撮影）	11
		下 高崎 5 号墳羨道部の調査（栗原撮影）	13
	4	上 高崎 5 号墳石室前面の石組（栗原撮影）	11
		右 高崎 5 号墳石室奥壁の石組（栗原撮影）	11
	5	1 高崎 5 号墳石室左壁外側の石組（栗原撮影）	11
		2 高崎 5 号墳石室右壁外側の石組（栗原撮影）	11
	6	右 高崎 5 号墳奥壁外側の石組（栗原撮影）	11
		下 高崎 5 号墳石室掘方と石室石組（栗原撮影）	11
	7	高崎 5 号墳出土土器その 1（上野撮影）	13
	8	1 高崎 5 号墳出土土器その 2（上野撮影）	13
		2 高崎 5 号墳封土中より出土の石器と縄文式土器（上野撮影）	21
	9	1 高崎 6 号墳全景（上野撮影）	22
		2 高崎 6 号墳主体部の状況（上野撮影）	22
	10	1 大又遺跡近景（上野撮影）	28
		2 大又遺跡発掘状態（上野撮影）	28
	11	1 大又遺跡住居跡群（上野撮影）	28
		2 大又遺跡 3 号住居跡（上野撮影）	30
	12	1 大又遺跡 5 号・6 号住居跡（上野撮影）	33
		2 大又遺跡 4 号住居跡内土器出土状況（上野撮影）	30
	13	大又遺跡 4 号（1～6）・6 号（下段 1～2）住居跡出土土器（上野撮影）	30
	14	1 大又遺跡 7 号・8 号住居跡（上野撮影）	33
		2 祭祀遺物出土の竪穴状遺構と高崎 6 号墳（上野撮影）	37
	15	大又遺跡 7 号（上 2 段）・8 号（中段 1～2）住居跡出土土器と土壇出土土器（下 2 段）（上野撮影）	35
	16	1 祭祀遺物出土状況（上野撮影）	37
		2 土壇（上野撮影）	35
	17	大又遺跡出土祭祀遺物（上野撮影）	37
	18	大又遺跡各グリット出土土器（上野撮影）	40
	19	大又遺跡出土縄文式土器と石器（上野撮影）	42

挿 図 目 次

	頁
第1図 早良平野周辺遺跡分布図（国土地理院地形図 1：50,000 上野精志作成）……………	扉
第2図 高崎付近地形図（九州地方建設局作成 1：1,000 尾形桂子製図）……………	4
第3図 高崎5号墳地形図（栗原和彦・上野・中尾徹実測、尾形製図）……………	9
第4図 高崎5号墳墳丘断面図（栗原・上野実測、尾形製図）……………	折り込み
第5図 高崎5号墳墓道断面図（栗原・上野実測、栗原製図）……………	13
第6図 高崎5号墳出土土器その1（栗原実測、製図）……………	14
第7図 高崎5号墳出土土器その2（栗原実測、製図）……………	16
第8図 高崎5号墳出土土器その3（栗原実測、製図）……………	18
第9図 高崎5号墳出土土器その4（栗原・尾形・井沢洋一実測、栗原製図）……………	19
第10図 高崎5号墳出土紡錘車と刀（栗原実測、製図）……………	20
第11図 高崎5号墳封土中より出土の縄文式土器（栗原実測、製図、手拓）……………	21
第12図 高崎5号墳封土中より出土の石器（井沢実測、栗原・井沢製図）……………	21
第13図 高崎6号墳平面図（柳田康雄実測、尾形製図）……………	23
第14図 大又遺跡3号住居跡実測図（上野実測、上野・尾形製図）……………	29
第15図 大又遺跡4号住居跡実測図（上野実測、上野・尾形製図）……………	31
第16図 大又遺跡4号住居跡出土土器実測図（栗原・上野実測、上野・尾形製図）……………	32
第17図 大又遺跡6号住居跡出土土器実測図（上野実測、製図）……………	33
第18図 大又遺跡7号・8号住居跡実測図（柳田・桜井康治・桑田和義・渡辺和子実 測、上野・尾形製図）……………	34
第19図 大又遺跡8号住居跡出土土器実測図（上野実測、製図）……………	35
第20図 大又遺跡Q-6区土壇実測図（上野実測、製図）……………	36
第21図 大又遺跡土壇出土土器実測図（上野実測、製図）……………	36
第22図 大又遺跡竪穴状遺構と祭祀遺物出土状態実測図（柳田・上野実測、上野製図）…	38
第23図 大又遺跡出土祭祀遺物実測図（栗原実測、上野製図）……………	39
第24図 大又遺跡グリット出土土器実測図（栗原・上野実測、上野製図）……………	41
第25図 大又遺跡出土縄文式土器（井沢実測、上野製図・尾形手拓）……………	42
第26図 大又遺跡出土石器実測図（上野実測、製図）……………	43
第27図 福岡県内の土製鏡分布地図（上野作成）……………	45
第28図 土製鈴鏡分布地図（上野作成）……………	47

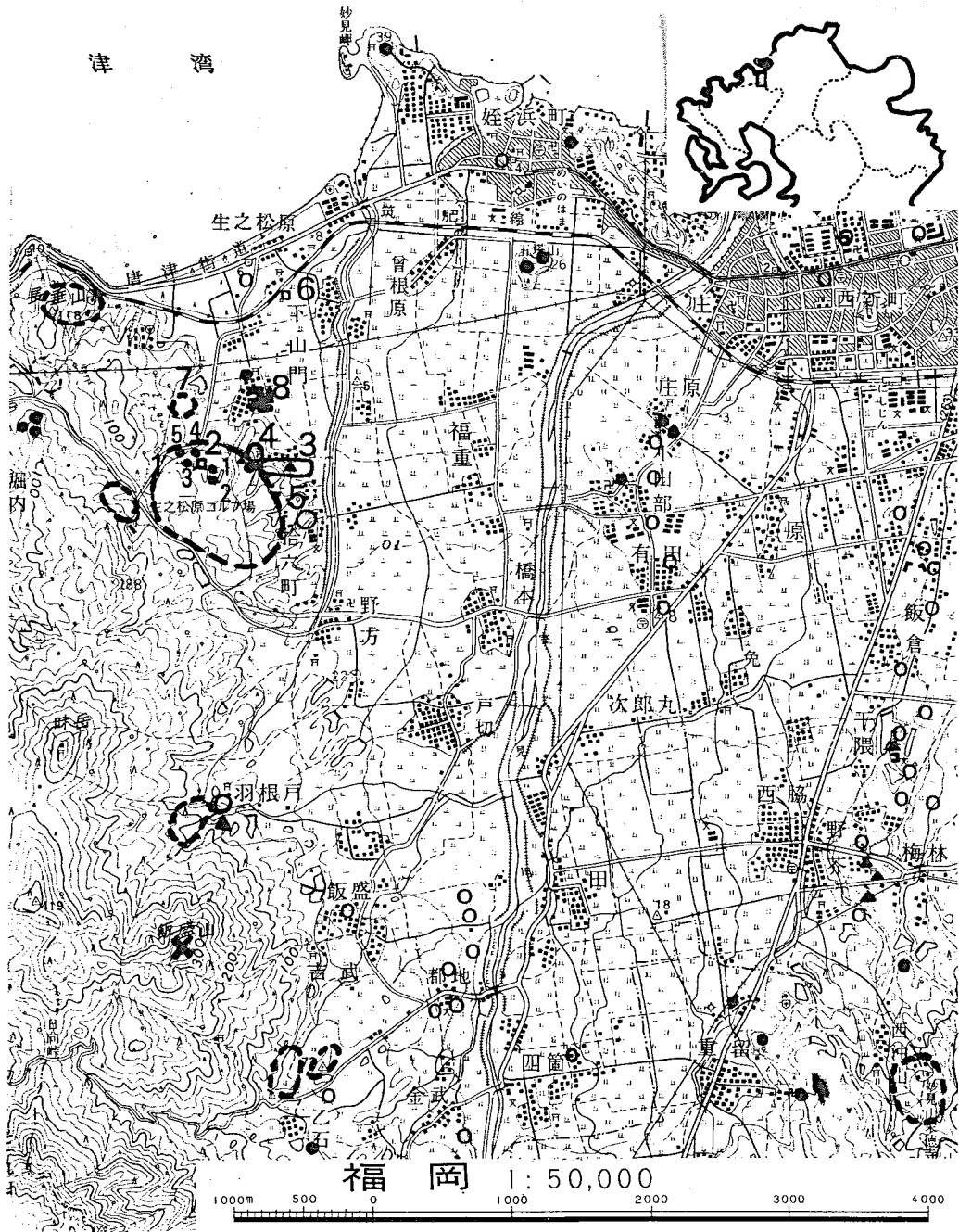
付 図 目 次

本文対照頁

付図1図	高崎5号墳封土排除後の平面図（横田義章・栗原和彦実測、尾形桂子製図）…	9
付図2図	高崎5号墳石室実測図（栗原実測、尾形製図）……………	11
付図3図	高崎5号墳石室外側石組実測図（横田・栗原実測、尾形製図）……………	11
付図4図	高崎5号墳石室石材対照番号図（栗原作図、尾形製図）……………	11
付図5図	大又遺跡遺構配置図（田坂美代子・栗原・柳田康雄・上野精志・桜井康治・ 桑田和義・渡辺和子実測、尾形製図）……………	28

表 目 次

第1表	高崎古墳群一覧表（中尾徹作成）……………	24
第2表	大又遺跡調査対照表（上野精志作成）……………	28
第3表	福岡県内出土の土製鏡一覧表（上野作成）……………	45



第1図 早良平野周辺遺跡分布図

△縄文 ○弥生 ●古墳 ○古墳群 ㊦寺院 ×経塚

- 1. 高崎古墳群(小番号は各古墳名) 2. 大又遺跡と高崎6号墳 3. 湯納遺跡
- 4. 宮ノ前遺跡 5. 畑ヶ尾遺跡 6. 下山門遺跡 7. 草場古墳群
- 8. 城ノ原廃寺

第 1 序 説

1. はじめに

昭和46年度の一般国道202号線今宿バイパス建設計画地内の埋蔵文化財の発掘調査は、福岡県教育委員会の副申に基づいて、文化庁と建設省の協議の結果、一部分その路線が決定された。

このため

1. 路線決定部分（福岡市西区大字福重から福岡市西区大字今宿字青木まで）の未調査の遺跡、高崎5号墳と昭和44年度に予備調査を実施した、大又遺跡・湯納遺跡の本調査。
2. 路線未決定部分（福岡市西区大字千里から糸島郡前原町大字有田まで）の条里遺構
1・弥生時代散布地2ヶ所の予備調査。

合計6ヶ所の発掘調査を実施した。

このうち、2については、本調査が不必要となったものもあるが前原地区の本調査と併わせて報告することとした。

また、本調査を実施した3遺跡のうち、湯納遺跡は、弥生時代から歴史時代にかけての大規模な遺跡であることが年度末になって判明したため九州地方建設局と協議の結果、昭和47年度内の発掘調査をさらに継続することとなった。このため湯納遺跡についての報告は別に行なうこととし、本報告では、調査の終了した高崎5号墳・大又遺跡の発掘調査中に発見された高崎6号墳・大又遺跡のみを報告することとした。

なお『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』において、多数の副葬品を出土し、いろいろな点で保存すべきものと考えていた高崎2号墳、さらに本調査を実施することにより、大きな成果の期待された宮の前遺跡E地点は、本調査をまたずに削平された。本書の刊行までの関係者は次のとおりである。

発掘調査関係者

総括

福岡県教育委員会	教 育 長	吉 久 勝 美
	教 育 次 長	森 田 實
	教 育 次 長	村 上 智
	文化課々長	岩 下 光 弘
	〃 課長補佐	菅 隆

庶務会計

文化課庶務係長	姫野 博
“ 主事	中村 一世

調査員

文化課々長技術補佐	渡辺 正気
“ 調査係長	藤井 功
明治大学大学院卒業生	田坂美代子
文化課技師	横田 義章
“	栗原 和彦
“	柳田 康雄
“	上野 精志

調査補助員

福岡大学学生	桜井 康治	桑田 和義
慶応大学学生	渡辺 和子	

地元協力者

緒方 左近	柴田 六郎	緒方 徳	海津 一位
西原 義種	嶋田 三右エ門	高宮 司	原 エツ
海津 シヅエ	緒方 チヨエ	清水 文代	清水 貞子
嶋田 みち子	高宮 ノブエ	高宮 久子	原 チヨノ
真鍋 恵美子	西原 春子	津和崎 八重子	緒方 君子

また、本書の執筆にあたって、牟田房子・尾形桂子・井沢洋一・中尾徹・伊東登美子の方々の協力を得た。

2. 拾六町周辺の遺跡と環境

高崎5号・6号古墳と大又遺跡は、早良平野の西方にあり、拾六町周辺遺跡群のなかに入るものである。拾六町周辺遺跡群一帯の丘陵は、佐賀県と福岡県を境する背振山地より北方の玄界灘に向けて中起伏山地として山麓地と山地が続き、さらに小起伏丘陵地と成り台地を形成している。この拾六町周辺遺跡群は、中位の砂礫台地と下位の砂礫台地上に位置する。前面には早良平野を貫流する室見川による運搬砂礫に形成された扇状地性低地（福岡低地）が在り、さらにその下流には博多湾岸低地としての三角洲が沖積作用をうけて生じ、現在も沖積作用を受け得る低湿な平野で、河川によって作られた三角洲・後背湿地性低地で広く分布し、さらに海口に面した生の松原には海岸の砂が海上から吹きつける風のために運ばれて堆積してできた

砂丘が博多（福岡）湾に広く発達している。

拾六町周辺遺跡群は、大局的には早良平野周辺遺跡群に包括されていて、各時代にわたって数多くの遺跡が存在する。早良平野は西方を前述の通り背振山地より玄界灘に向けて派生した丘陵によって西の糸島平野と境し、南方は背振山地が高くそびえ、東方はやはり博多（福岡）湾に突出した平尾低丘陵によって福岡平野と境をなして南北8 km、東西4.5 kmの拡がりを持ち、この平野内には大小多くの河川が貫流して福岡低地及び砂丘が形成されているのである。

早良平野周辺遺跡は、この福岡低地を見下すことができる低台地上に立地しているものが多い。またこの平野内にはいくつかの独立した丘陵が点在しており、愛宕山や五塔山の白亜系深成岩よりなる花崗岩の標高30～50 mの起伏丘陵地が点在しているがこれにも古墳が築造されている。

各遺跡についての位置・立地や歴史的環境については、九州大学文学部考古学研究室編『福岡市有田古代遺跡発掘調査概報』第1集福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集1967年（昭和42年）3月、福岡県教育委員会浜田信也編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集1970年（昭和45年）3月、宮の前遺跡発掘調査団下条信行・沢皇臣編『宮の前遺跡（A～D地点）』1971年（昭和46年）6月に詳細に記述されておりそれを参照されたい。

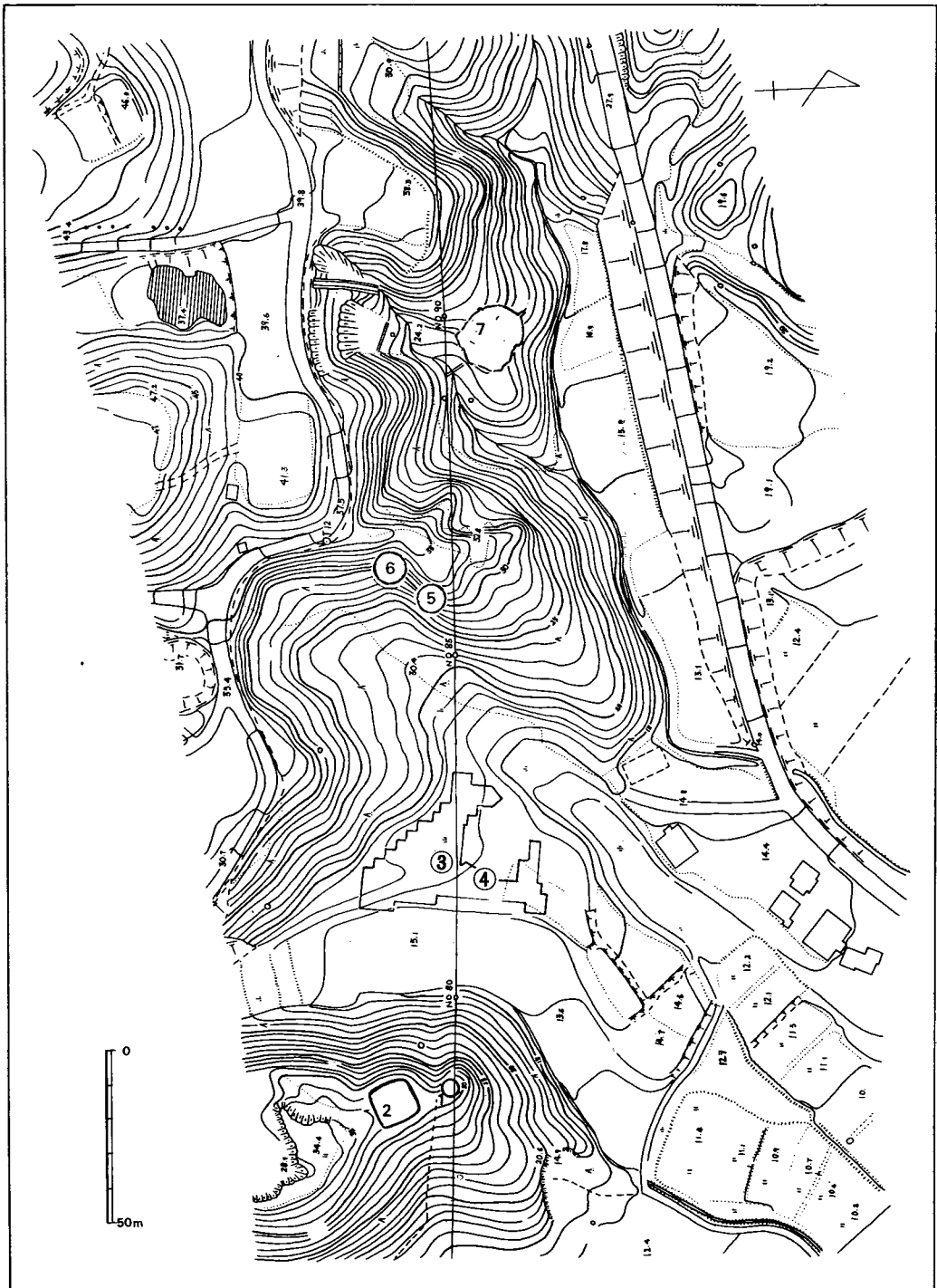
ここでは拾六町周辺遺跡群についてのみ簡単に触れてみたい。

早良平野には縄文時代の遺跡が、東方の七隈や干隈あたりに前期曾畑式土器や石鏃などが見られて、西方には、羽根戸にも知られていて、それより北方のこの拾六町周辺には知られていなかった。しかし、今日の開発ブームにより発掘調査が大規模に行なわれて新資料の増加を見ている。

先づ後述の拾六町字高崎の高崎5号墳封土中より黒曜石製石刃石器、早期の押型文土器片とその尖底部や石鏃が出土しており現在のところ最古のものである。拾六町字コノリを中心とする熊野神社前より十郎川にかけての湯納遺跡ではⅢ区に、条痕文土器が、又Ⅰ区にも条痕文土器や轟A式土器が出土し特に轟A式土器は標高5 m弱の竪穴状貯蔵穴（内に大量のイチイガシ在り）に伴うものと推測されており当時の海進を考える場合重要な意味をもつものである。

さらに前期になると後述の大又遺跡出土の曾畑式土器でも古い時期に比定できる土器片が在り、湯納遺跡Ⅰ区で中期末の阿高式土器、Ⅱ区では後期御領式土器が、晩期に入ると湯納遺跡Ⅰ区・Ⅱ区出土の夜臼式土器が出土している。また、高崎5号墳封土中や大又遺跡の小ピット内よりも、凸帯文土器が出土している。

その他の遺物を見ると大又遺跡の横形石匙（サヌカイト製）宮の前E地点の横形石匙（黒曜石製）が在り、また大又遺跡より後述の石斧が出土している。このように拾六町周辺には縄文時代の遺物が点在している。



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| (1) 高崎1号墳 | (2) 高崎2号墳 | (3) 大又遺跡 | (4) 高崎6号墳 |
| (5) 高崎4号墳 | (6) 高崎3号墳 | (7) 高崎5号墳 | |

第2図 高崎付近地形図 (縮尺2000分の1)

弥生時代になるとこの地域の遺跡は、急激に増加し中期後半から後期、そして古墳時代前期に盛行をみる。中期後半から宮の前遺跡、湯納遺跡にかけて住居跡・水田遺構・墳墓等が検出され一つの共同体を形成していたもので湯納遺跡Ⅰ区（十郎川側）に水田遺構が在り、低丘陵上には住居跡群（湯納遺跡Ⅲ区）その西方高丘陵上には住居跡群、墳墓群としての宮の前遺跡が在り、また約150m南方の小丘陵上には畑ヶ尾遺跡として弥生中期後葉から後期初頭の甕棺墓遺跡が存在する。

このように拾六町周辺の弥生時代中期から後期にかけては具体的に生産遺跡・住居跡群・墳墓群とまとまって集落全体を把握できる状態にあるが、これは現在発掘調査中である湯納遺跡の報告書にまちたい。

古墳時代の墳墓も数多く存在し、この第3集で取り扱う高崎古墳群（6基）を初め、その後方丘陵上の現在生の松原ゴルフ場の造成により消滅した古墳が5～6基存在していたと言われ高崎古墳群は11～12基により形成されていた。高崎1～6号墳群は、宮の前遺跡の西方250mの八手状に北方に突き出た三つの丘陵上に点在するもので1・2号古墳は同一丘陵上に隣接して築造されその西方150mに3・4号は谷と大又遺跡の存在する低台地をへだてた丘陵傾斜面に隣接して存在し、6号古墳はその中間の低台地上に在る。5号古墳は、3・4号古墳の丘陵より一つ谷をはさんだ西方90mの小丘陵上頂に位置している。これら1～5号古墳は後期横穴式石室を有し、6世紀前半から7世紀前半代の古墳である。6号墳は竪穴式系横口式石室と推定され古墳群中では古い部類に属するものであろう。さらにこの高崎古墳群より北方約400mの地点には草場古墳群が存在している。

古墳時代の生活跡の遺構は、本報告書第3章の大又遺跡のみで、前記湯納遺跡では土師器や須恵器が出土しているが少量である。近年（1972年）に下山門の老岐神社の裏手で福岡市教育委員会により下山門遺跡の発掘調査が実施された。この遺跡はちょうど福岡低地と生の松原の砂丘が接する低地であるが古墳時代後期の土器や木製品を出土している。この三つの遺跡に共通していえることは、ともに祭祀遺物を出土していることである。

大又遺跡は、第3章のように土製祭祀遺物が、湯納遺跡では滑石製の孔円板（1孔）やその未成品と剣形模造品の未製品と推定される一連の滑石製品が土師器和泉期に比定できる土器群と出土しており、下山門遺跡では須恵器第Ⅲ型式に伴ない多くの滑石製祭祀遺物の出土をみている。これらはいずれも集落内における祭祀形態を示すものと思われるが、それに自然神として「海」が加味されたものであろうか。

歴史時代に入ると、著名な城の原廃寺が存在する。早良平野一帯は「倭名抄」によるサワラのコホリでこの郡内に六郷が記載されていてそれは毗伊郷、能解郷、額田郷、早良郷、平郡郷、田部郷の六郷であり、この拾六町周辺は額田郷に比定されよう。

この時代の遺構として湯納遺跡Ⅱ区にて掘立て遺構や井戸が検出されており具体的にはこの

報告に待ちたい。またこの地域には条里制の存在も指摘されている。

以上のように拾六町周辺を含む早良平野一帯には数多く貴重な遺跡が分布している。しかし、近年とくに福岡市郊外のこの附近は頓に開発の波がおしよせ、このように埋蔵文化財を含めて自然までが大きく変貌しているのが現状である。

第2 高崎古墳群

福岡市西区大字拾六町所在群集墳の発掘調査 その2

本文目次

1.	はじめに	7
2.	高崎5号墳	7
	(1) 調査の経過	7
	(2) 地形と環境	9
	(3) 墳丘	9
	(4) 石室	11
	(5) 石室の構築について	11
	(6) 出土遺物	13
3.	高崎6号墳	22
4.	おわりに	22

第2 高崎古墳群

1. はじめに

高崎古墳群の発掘調査報告は、すでに『一般国道202号線今宿バイパス関係文化財報告第1集』（以下「今宿バイパス1」と略す。）で、第1号墳から第4号墳までなされている。今回新たに2基を加えて、6基の発掘調査がなされたことになった。

高崎古墳群は、福岡市西区大字拾六町字高崎にある。高崎古墳群は、ゴルフ場の建設のときに、少なくとも5～6基の古墳が破壊されたもようで、そのなかには高崎2号墳と同程度の多量の須恵器が出土した古墳もあったと聞いている。すでに調査された今宿バイパスの路線内6基を含めると少なくとも11～12基程は存在していたことになる。

しかし、今宿バイパスの建設によって全くその姿を消す運命にある。

2. 高崎5号墳

(1) 調査の経過

昭和44年度の高崎古墳群の発掘調査の終了後、さらに古墳1基がバイパスの予定路線内にいることが調査担当者によって知られていた。

この場所が、すでに昭和45年に路線決定の範囲に含まれていたため、5月末に渡辺、藤井、栗原、柳田が現地を踏査し、8月に調査することとした。しかし他の調査や地主調べなどで、旧盆あけから発掘調査に入ることになったのである。

高崎5号墳の発掘調査員は、次のとおりである。

調査員	明治大学大学院卒業生	田坂美代子
	福岡県教育委員会文化課課長技術補佐	渡辺正気
	調査係長	藤井功
	技師	横田義章
	〃	栗原和彦(担当者)
	〃	柳田康雄
	〃	上野精志
調査補助員	福岡大学学生	桜井康治
	慶応大学学生	渡辺和子

調査日誌抄

- 8月16日 器材運搬。
- 8月17日 樹木の伐採と付近の水準点より標高を移し、バイパス路線センター杭 No. 90をB・Mとする。
- 8月18日 墳丘の地形実測を行なう。横穴式石室の主軸を想定して墳丘に十文字のトレンチを入れる。
- 8月19日 墳丘横断トレンチの東北隅で土留の石と思われる石にあたり、その下部の土が地山と思われる部分にあたったので止め、墳丘の東北4分の1を一気に排土する。
- 8月20日 横断土層図の実測をする。羨道部から須恵器の破片が出土し始める。羨道部には、左壁の石や一番手前の天井石が落ち込んでいた。その脇から長頸壺の頸のないのが出土。
- 8月23日 墳丘右半の封土を排除する。羨道部の調査を一応止め、墓道を探るため幅30cmのトレンチを設定したが、降雨のため午前中で作業中止。
- 8月24日 墳丘右半分の封土の排除を終わる。墓道に設定したトレンチの土層観察によると墓道は上下2層ある。
- 8月25日 羨道部に縦断面のトレンチを入れる。この結果、出土する土器類も土層により2つに分けられることがわかる。
- 8月26日 羨道部に落ち込んだ石を除き、掘り進んだところ閉塞用の石と思われる一枚石にあたる。封土中より縄文時代早期の土器片、石鏃などを発見する。
- 8月27日 墳丘に十文字の畦畔を残し、他の部分は地山まで排土する。地山の上に須恵器の甕が、石室から左半に1ヶ所、右半に2ヶ所みつかると。
- 8月28日 石室内を清掃。刀の破片、須恵器2片みつけた。第2次大戦後、この横穴式石室に人が住んでいたとのことで、コンロの破片やご飯茶碗の破片などでよごれていた。
- 8月30日 台風来襲。
- 8月31日 台風により、墳丘に残っていた畦畔が崩れる。雨のため遺物整理。
- 9月1日 台風で崩れた土の清掃。墳丘南西部の溝状の地山の落込を掘る。
- 9月2日 石室前面の清掃。写真撮影の準備。
- 9月3日 写真を撮影する。
- 9月4日～7日 石室内の実測準備。
- 9月8日～10日 石室平面より測り始め、石室横壁、奥壁の実測。
- 9月11日～14日 石室外の平面実測準備。
- 9月15日～25日 平面実測。
- 9月26日～10月7日 石室外側の立面実測。

10月8日～10月9日 石室内と石室外とからの石の積みかたを検討し調査を終了する。

(2) 地形と環境(第2・3図)

高崎5号墳のある小丘陵は、標高40m程の高さから、標高27.5mまで一気に下ったあたりで1辺15mほどのテラスが出来ている。この下は、東側の谷川に沿って、東北方にのび標高15m程の所で平地となる。この丘の中段のテラスに高崎5号墳はある。

高崎5号墳は、このテラスにやっとおさまるほどの不整形な小円墳である。墳丘の東南に盗掘された穴があり、第2次大戦後にこの古墳を住居としていた人も、ここから出入りしていたようである。

墳丘は、西は尾根から切り離れた形で、南は谷川にいくぶん削りとられて落ち込み、北東部は墳丘のすそから1～2mで谷となっている。このため、東から北にかけて眺望が開け、生の松原を前面に博多湾、能古島、玄界島、志賀島などのすばらしい景色が一目でみわたせる。

(3) 墳丘(第4図・付図1図、図版1-1・2)

高崎5号墳は、石室の前面が削られているが石室主軸線上で13m、横断径で13.2mほどの円墳である。高さは、墳丘の西側では約1.8mに、東側では約3.5mの高さに見える。

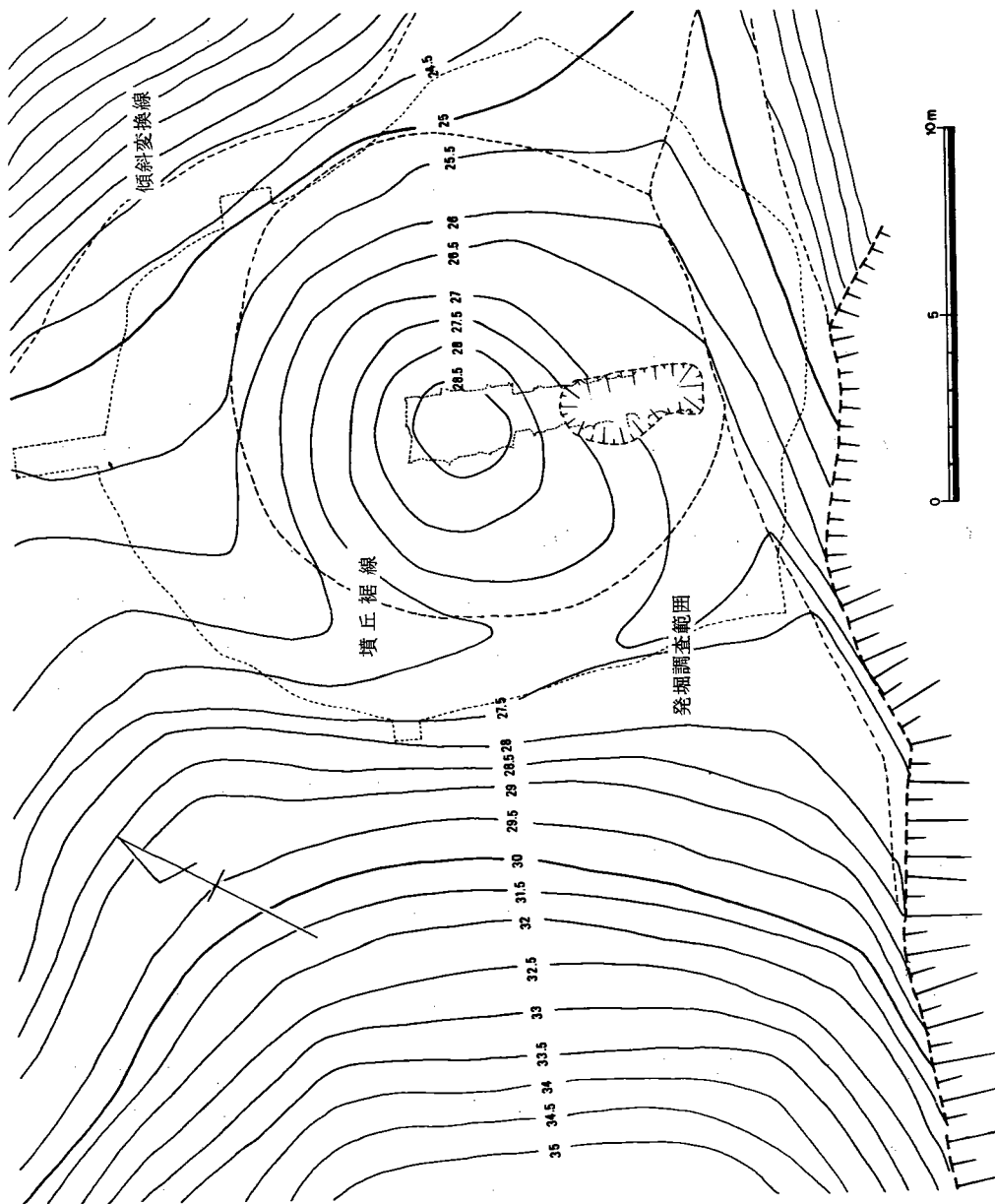
この古墳の築造のために西側の地山を削りとり、高崎2号墳と同様に切断溝(幅1.2～1.4m・深さ20～40cm)をつくり、溝の東肩から2.5m東に石室^(註1)の掘方を掘っている。

石室の掘方は、西の壁が1.80mほどで、東の壁より約50cmほど高くなっている。幅は横断面を測った底部分で3.40mを測る。形は、矩形を企図したものと想像されるが発掘調査のかぎりでは不整形なものとなっている。

^(註2)
石室の石材を積みあげながら封土を盛っていったものと思われる。封土は、5～6種類の土を盛り上げるがその混入の具合で15種の土層名をつけた。墳頂までの封土は、地山から石室左半で2.2m、右半で2.7m、石室天井石上からは0.7mほどである。

註1 浜田信也「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第1集福岡県教育委員会1970、33頁を代表させたが、「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)」福岡県教育委員会1972、鈴ヶ山古墳群、山の前古墳群、平原古墳やその他多くみられ、古墳を築造する場合このような溝を造ることは、後期の古墳群では常識となっている。しかし、この溝は、企図された墳丘の規模を計測する重要な資料となりうるものと予想するが、今はなにひとつなし得ていない。

註2 発掘調査のときには、掘方の形状は上部は石室架構の影響をうけ変形するものと思いき、底の形状を確認することが必要と考えていたが、今回はそれをなし得ていない。なお、北方隅の掘方のくずれは、石材の搬入のときのものと推測している。

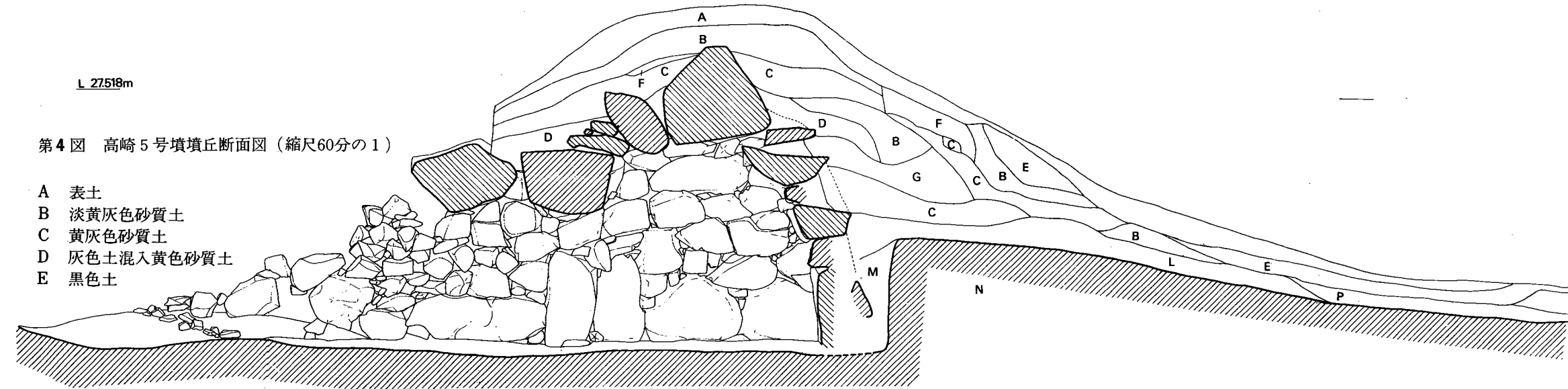


第3図 高崎5号墳地形図 (縮尺200分の1)

L 27518m

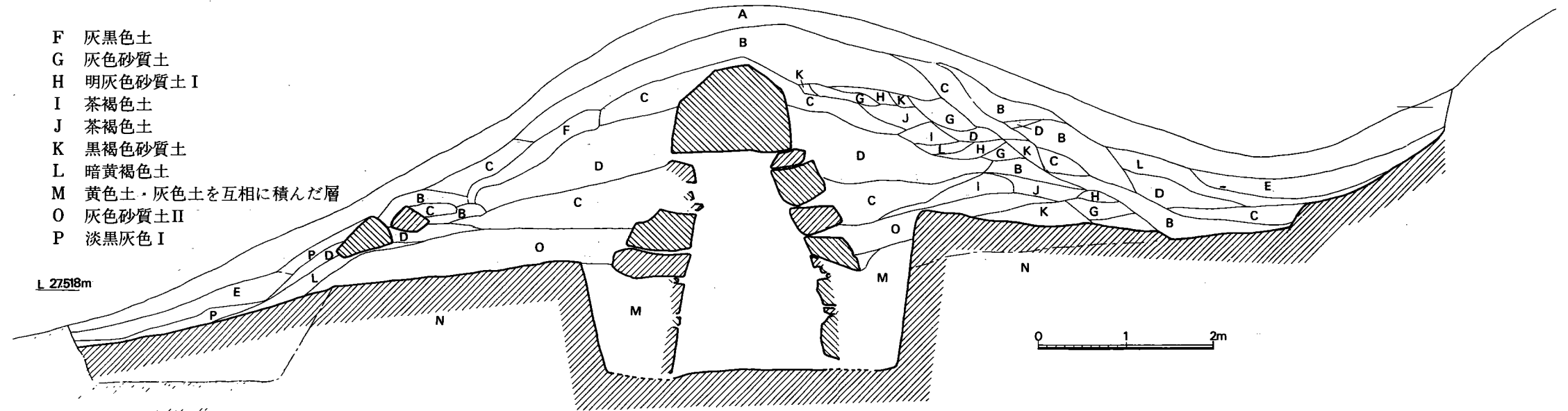
第4図 高崎5号墳墳丘断面図(縮尺60分の1)

- A 表土
- B 淡黄灰色砂質土
- C 黄灰色砂質土
- D 灰色土混入黄色砂質土
- E 黒色土



- F 灰黒色土
- G 灰色砂質土
- H 明灰色砂質土 I
- I 茶褐色土
- J 茶褐色土
- K 黒褐色砂質土
- L 暗黄褐色土
- M 黄色土・灰色土を互に積んだ層
- O 灰色砂質土 II
- P 淡黒灰色 I

L 27518m



(4) 石室 (付図2・3図、図版4-1・2)

横穴式石室である。石室主軸は、N-37°-Eほどである。

横穴式石室は、両袖式で単室の形式をとっている。全長は左壁で8.19mあるが、左壁と右壁とでは、左壁が追葬時に積みたされたものとみえて、約1.91m長い。玄室の大きさは長さが主軸で2.71mを測り、奥壁幅1.79m、玄室入口1.64mを測る。

奥壁は、基部の2石を立てて使い、その上は横壁と持送りの関係を保ちながら平積みになっている。基部の2つの石の厚さは、30~40cmほどのものと思われるが、立てて使用したときの安定を計るために手ごろな石を選んで下にかませている。このやり方は、左壁に多く見られる。

側壁は、左壁・右壁とも基部に3石ずつを立てて使用しているが、袖石よりの1石は狭い方(木口)を上下に使い、他の2石は広い方(木端)を上下に用いている。

これらの根石の上は横壁のどの石も平積みで持送り架構をとるが、右壁に対して左壁の持送りが強くなっているのは、地山と掘方の関係によるもので、西の掘方の高さが東の掘方の高さより30cm程高いためかと思われた。

羨道部では、左壁だけ追葬のときに積みたしたものと思われるが、3~5石が羨道に落ち込んでいた。(図版3-右) 天井石は1番手前の1石が羨道部に落ち込んでいた外は、すべて完全に残っていた。落ちた1石を加えて両壁に渡しかける石は5石だけとなり、ほかはこの天井石を安定させるための補助にすぎない。

なお、これらの石材は、すでに調査された高崎古墳群の石材と同様、すべて花崗岩である。

(5) 石室の構築について (付図4図、図版4・5・6)

すでに石室のところで石材の積み方についてふれたので、ここでは積まれた順序、封土などの関係から少しばかりふれておきたい。

付図4図は、高崎5号墳の石室石組の実測図をとりおえたのち、ボーリング棒を石組のあいだに突きさしたり、木槌で石をたたいたりして、石室内の石と石室外の石との関係をさぐったものである。これで見ると番号を入れてない石や羨道部に落ち込んでいた石を加えても大小約200個の石材で高崎5号墳は築造されたものと言えよう。

横穴式古墳の石室の石積みについては、孔舎衙武郎氏が奈良県倉橋池の横穴式石室について調査されたものがある。この古墳の石室の積み方は高崎5号墳の石室の積み方と非常に類似している。^(註1)

高崎5号墳の場合を考えてみると

- ① 奥壁93・96をおいて、右壁46・44・47・48と羨道部の根石、左壁の根石をおく。
- ② 右壁49・50・45・19・20・14・左壁89・ひとつおいて・84・85を平積みにつむ。

- ③ 奥壁97・98を置き、右壁39・41・42・43とそのならびの3石を置く。奥壁90を置き、88・83を置く。
- ④ 奥壁92・38を置き、右壁37・40・29・28・23・22・15・9を置く。
- ⑤ 奥壁91・36を置き、左壁86・81・80・ひとつおいて・70・71をならべる（これは逆にならべるのかもしれない）。
- ⑥ 羨道部、天井にc・dと羨道部に落ち込んでいた石の3石を置く。
- ⑦ 右壁30、左壁77、奥壁94とのあいだを小石で安定させながらもたせかけて積む。
- ⑧ 天井石を羨道の方からb・76・aを積み、石室を造り終わる。

以上、簡単に羨道部の石や、石と石との間の小石などを無視したまま記述した。つぎに2～3気付いたことを記すと、

高崎5号墳の場合、両側壁・奥壁とも持ち送りに架構しているが、石材のたせ方の関係から、左壁より常に右壁の石積みが先行してなされているのではないかと考えられることである。その1は、左壁の持ち送りが右壁のそれより急であること。その2は、①の段階で右壁の平面形がかなり整然とならぶのに対して、左壁ではやや乱れた感じがある。その3は、④、⑤の段階で、右壁の石がほぼ水平にならべられているのに対して左壁のそれは、上から下、又は下から上へならべられている。などのことが上げられようか。また、土層図によると、高崎5号墳の立地する場所の関係もあろうが、右壁はかなり水平に盛り土がされており、この上を石をはこぶことが出来たものと思われるが、左壁では石材を落とし込むようになっている。これは、
(註2)
高崎2号墳でも見られた。
(註3)

註1 孔舎衛武郎氏が奈良県倉橋池古墳の横穴式石室について行なった報告文をみることが出来ないで、末永雅雄著「大和の古墳」河原書店昭和25年134頁によった。この横穴式古墳の築造順序は、一頁の図によって示されているが、それによると

- ① 奥壁の1石より立てはじめ、玄室、さらに羨道部へとならべて行く。石材の使い方は、玄室の石は立てて使用するが、木端にあたる部分が上下に使われているように見え、袖石のみ木口を上下に使用している。
- ② 二段目の石からは、すべて平積みの積み方で、奥壁の方から順に羨道部へとならべていく。
- ③ 羨道部入口の石積みを小さな石で調整し、次に奥壁の二段目を積みあげ、側壁の三段目を壁の方から積んでいく。
- ④ 羨道部の天井石を玄室の方から積みあげてしまう。
- ⑤ 奥壁の三段目を積み、側壁の四段目を積んでしまったのち、羨道部から奥壁の方へ天井石を積みあげてひとつの横穴式石室を造り終わる。

註2 この証明となるかは疑問であるが、石室用の石材の使い残しと思われる石が第4図左半のO土層の上に残されていた。

(6) 出土遺物

遺物の出土状況（第5図、付図Ⅰ図、図版3一右・下）

石室内は完全にあらさされていて、刀の破片と須恵器の破片が若干あったにすぎない。多くの土器類は、羨道から墓道にかけての堆積土中からの出土である。

堆積土は大きく上・下の2層に分けられ、下層は細かく3層に分けられる。しかし、上層の土器と下層の土器とで接合するものがあり、土層による土器の分離は不可能であった。

また、墳丘右半盗掘穴に近い部分は、ややフラットな地形となるが、ここの表土の下からも石室内から掻きだされた形で土器の一群があった。

また、墳丘地山の上に石室左半で1ヶ所、右半で2ヶ所、須恵器の甕がみつまっている。

このほかに、封土からの出土遺物に縄文式土器と石器片などがあった。以下おもな出土遺物の説明を行なう。

須恵器

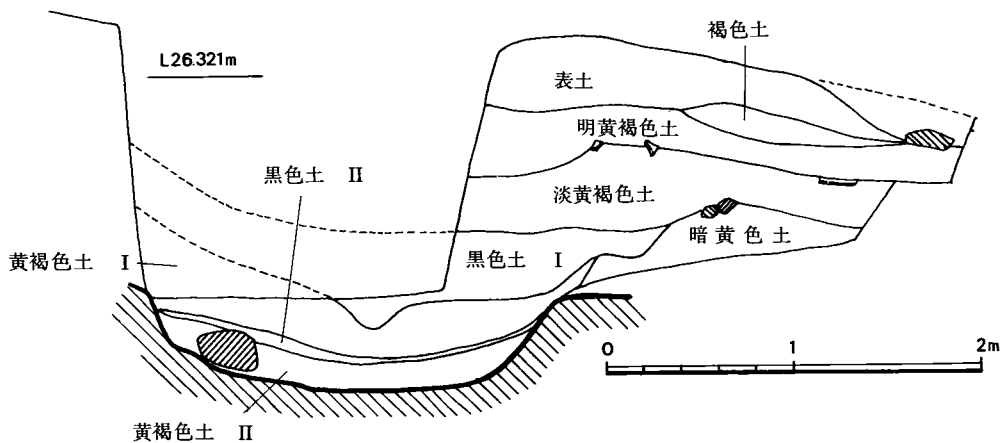
杯の蓋

杯の蓋は、つまみのつくつかない、受けのつくつかないによって、次の3つに分類出来る。

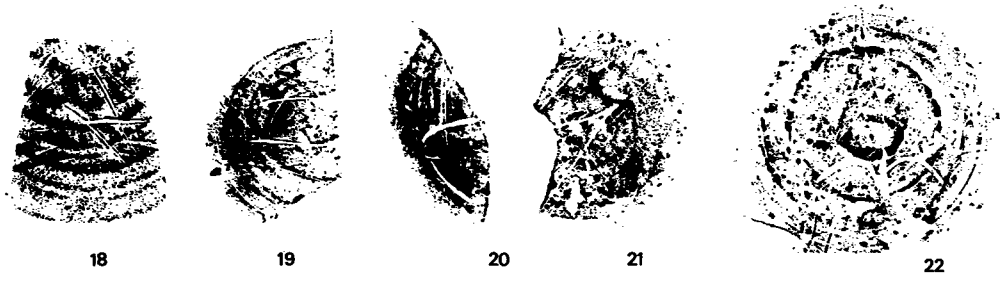
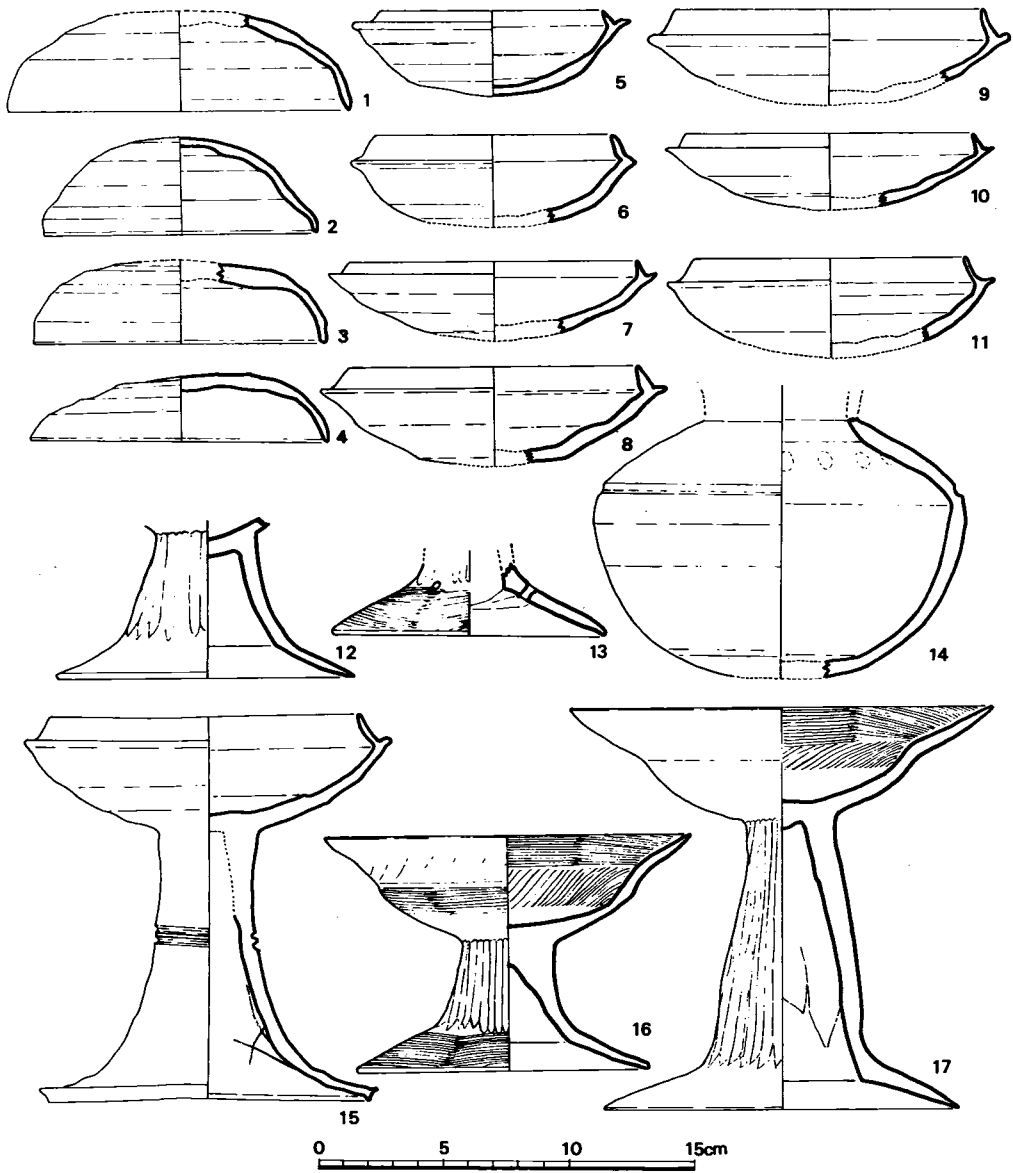
I類 つまみも受けもつかないもの。

II類 身の受けがつくもの。

III類 つまみのつくもの。



第5図 高崎5号墳墓道断面図（縮尺40分の1）



第6図 高崎5号墳出土土器その1 (縮尺3分の1)

I a類 (第6図1、図版7-1) やや大形のものである。口径13.7cm、器高4.1cmを測る。色調は暗赤灰色で、焼きもかたい。外側底部をヘラ削りし、内面・外側の上部は、横ナデである。底部にヘラ記号と思われるヘラの痕がある。第6図20はその拓影である。

I b類 (第6図2、図版7-2) 小形であるが、丸い感じのするものである。杯の身としてあつかうべきかもしれない。口径10.9cm、器高4.1cmを測る。色調は灰白色、焼成も良い。胎土に砂粒を含んでいる。^(註1)整形・調整はI a類とは同様であるが、底部ヘラ削りは右まわりに外側から中心に向かって行なわれている。

I c類 (第7図3・4、図版7-3・4) やや小形の土器である。口径10.7cmほどを測り、器高2.7cm~3.2cmほどを測る。

3は、色調茶灰色、焼成は良い。胎土やや砂粒を含む。4は、色調暗灰色、焼きも良い。やや砂粒を含む。第6図拓影22は、この土器の底部に記されたヘラ記号である。

II類 (第7図1・2、図版8-1・7) 口径12.7cm~13.8cm、器高2.2cm~2.5cmを測る。1・2ともに、完形の土器である。色調は暗灰色、砂粒を含むが、焼成は良い。天井部のみヘラ削りが右まわりに、外側から中心へ向って行なわれている。焼成の温度が高いためであろうか、2点ともやや歪んでいる。

III a類 (第7図6、図版8-9) 口唇部がやや直線的に立ちあがるものである。

口径13.8cmを測り、器高は2.0cmほどになるものと思われる。焼けひずんでいるが、色調は青灰色で砂粒を少し含んでいる。

III b類 (第7図7・8、図版8-3・8) 口唇部から天井部までゆるやかな傾斜を示すものである。

口径13.9~14.8cmを測る。器高は2.2~2.9cmほどとなろうか。7は、淡茶褐色で、砂粒を含んでいる。焼きは瓦器質という感じで悪い。天井部は左まわりのヘラ削りをしている。

8は、灰黒色で砂粒を含んでいるが焼きは良い。天井部のヘラ削りは7と同じく左まわりである。

杯の身

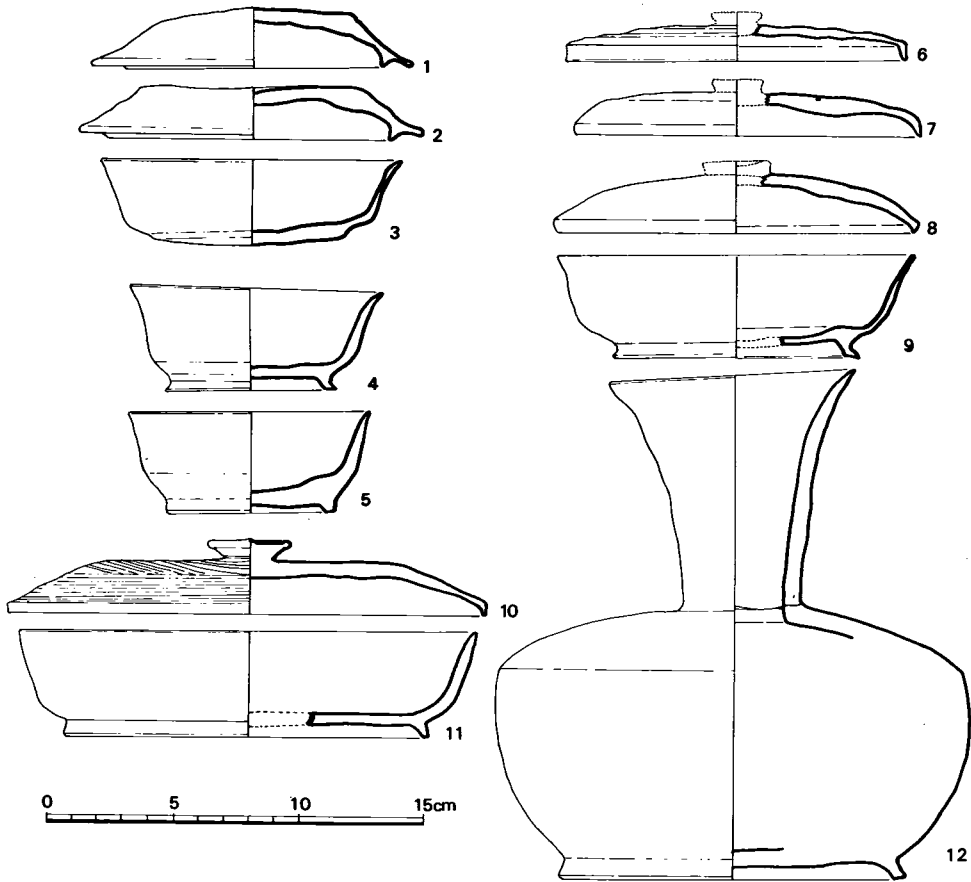
杯の身もその形態から、3つに分類することが出来る。

I類 蓋受のつくもの。

II類 口縁が外反するもの。

III類 高台をつけたもの。

I a類 (第6図5、図版7-5) I類7点のうち最も小型のもので、本来蓋としてあつかうほうが良いのかもしれない。口径9.0cm、最大径11.2cm、器高3.4cmを測る。色調は暗褐色で、焼きひずんでいてかたい。^(註2)胎土に少量の砂粒を含んでいる。内面と立ちあがり部を



第7図 高崎5号墳出土土器その2 (縮尺3分の1)

横ナデして、底部はヘラ削りである。なお底部には、第6図21のヘラ記号がある。

I b類 (第6図6、図版7-6) 立ちあがりのおこしかたが他の杯の身とやや異なり、断面が土師器のような感じを与える。

口径9.3cm、最大径11.4cmを測り、器高は3.7cmほどとなろうか。色調は灰褐色、砂粒を含まない土器で、焼きもかたい。底部は、左まわりのヘラ削りである。

I c類 (第6図7・10、図版7-7・9) 器はやや大きく、立ちあがりが0.4~0.5cmと短いものをc類とした。

口径11.4~11.6cm、最大径13.1~13.2cmを測り、器高は3.1~3.2cmほどになろうか。

7は、色調は暗灰色、焼成も良い。胎土に、ほとんど砂粒を含んでいない。底部に、第6図19に拓影したヘラ記号がある。10も、色調は暗灰色、焼成も良いが胎土に少量の砂粒を含んでいる。

I d 類 (第6図8・9・11、図版7-8・10) 器は大きく、c類にくらべて立ちあがり
が0.9~1.0cmとやや大きいものをd類とした。

口径11.0~12.4cm、最大径14.0~14.6cmを測り、器高は4cm前後となるものと思われる。

8は、灰白色で砂粒を含むが、焼きの良い土器である。底部は左まわりのヘラ削りがなされている。9は、青灰白色の砂粒を含まない土器で焼きもよい。最も整った感じを与える。11は、赤灰色の焼きの良い土器である。

II類 (第7図3、図版8-2) 口径12.1cm、器高3.5cmを測る。完形に近い土器である。青灰色で、砂粒を含まず、焼成もかたい。底部は右まわりのヘラ削りをしている外は、横ナデの調整である。

III類 (第7図9、図版8-4) 9は、口径14.6cm、器高4.2cmほどの大きさとなろうか。灰黒色で、少量の砂粒を含むが、焼きはかたい。高台は付け高台で、貼り付けた痕が明瞭にみえる。

椀 (第7図4・5、図版8-10・11) 口径9.6~10.2cm、器高4.2~4.4cmを測る。

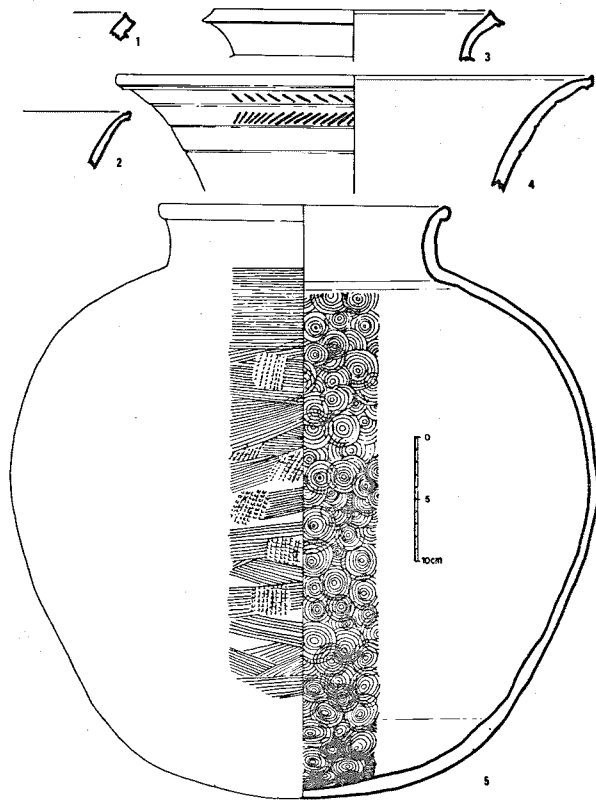
4は、暗青灰色で、砂粒を含むが非常にかたい完形の土器である。底は右まわりに撫でつけている。5は、灰白色で、砂粒を含み、焼きはあまい。高台は付け高台で、底部に左まわりのヘラの痕がある。

高杯 (第6図15、図版7-14) 杯の身I d類に脚を付けた感じのものである。口径12.4cm、最大径14.7cm、器高15.6cmを測る。青灰白色で砂粒はほとんど含まず、焼成も良い。脚部に2条の沈線を配し、外側全体をよく撫でつけている。脚部内側は実線部分まで撫でつけられている。その上部はいわゆるしぼりの痕が見える。脚部内側に、第6図18のヘラ記号がある。

短頸壺 (第6図14、図版7-13) 頸部より上を失っている。胴部最大径15.2cm、頸部までの残存部高10.4cmを測る。灰色で、胎土に少量の砂粒を含み、焼成も良い。肩に一条の沈線を入れている。肩より下はヘラ削りが右まわりに施されている。

長頸壺 (第7図12、図版8-12) 器高20.8cm、口径10.0cm、胴部最大径19.2cm、頸高9.6cmを測る。完形品の土器である。色調は灰白色、胎土に少量の砂粒を含む。焼成は良くない。外面は胴部肩よりは右まわりのヘラ削りの痕を残すが、他の部分は丁寧に横に撫でつけられている。接合は頸と胴の部分で行なわれていて、胴の上に頸をのせて貼り合わせている。高台は付け高台である。

甕 (第8・9図) は、大・小合わせて、7個体分の破片が出土しているが、ある程度の復原ができたのは3個体である。このうち、6・7が墳丘右半に2ヶ所かたまってみつかり、5が墳丘



第8図 高崎5号墳出土土器その3 (縮尺6分の1)

な甕となるものと思われる。口径38.4cmほどの大きさと成ろう。灰黒色の非常にかたい土器片で砂粒も少ない。頸部に三本の弱い沈線を入れて、沈線と沈線の間、櫛の押圧文をならべているが、最下段のそれは指で消されている。

5は、口縁まで復原出来た。器高47.8cm、胴部最大径47.6cm、口径23.4cm、頸部高5.0cmほどを測る。上半は、暗灰色で底部に近づくにしたがい灰白色となる。胎土に砂粒を含み、焼きは良くない。

6は、口縁部と底部を欠くが、全体の半分ほど接合できた。おおよそ5に近い感じの土器と成ろう。胴部最大径は46.4cmほどとなる。灰色で、砂粒も少なく、焼きも良い。

7は、上半部・下半部と接合は出来ないが重なる部分があり、破片も半分以上あるので一応の復原をした。器高84.2cm、胴部最大径75.4cm、口縁径45.8cm、頸部高13.6cmを測る。暗灰色の砂粒を含まない非常にかたい土器である。頸部は沈線と波状文・付点などで飾られている。付点は3つみついているが、5ヶほどと成ろう。この土器は3つの部分に分けて作られ、接合は頸・胴下半の2ヶ所で行なわれている。頸は胴の上ののせているだけである。

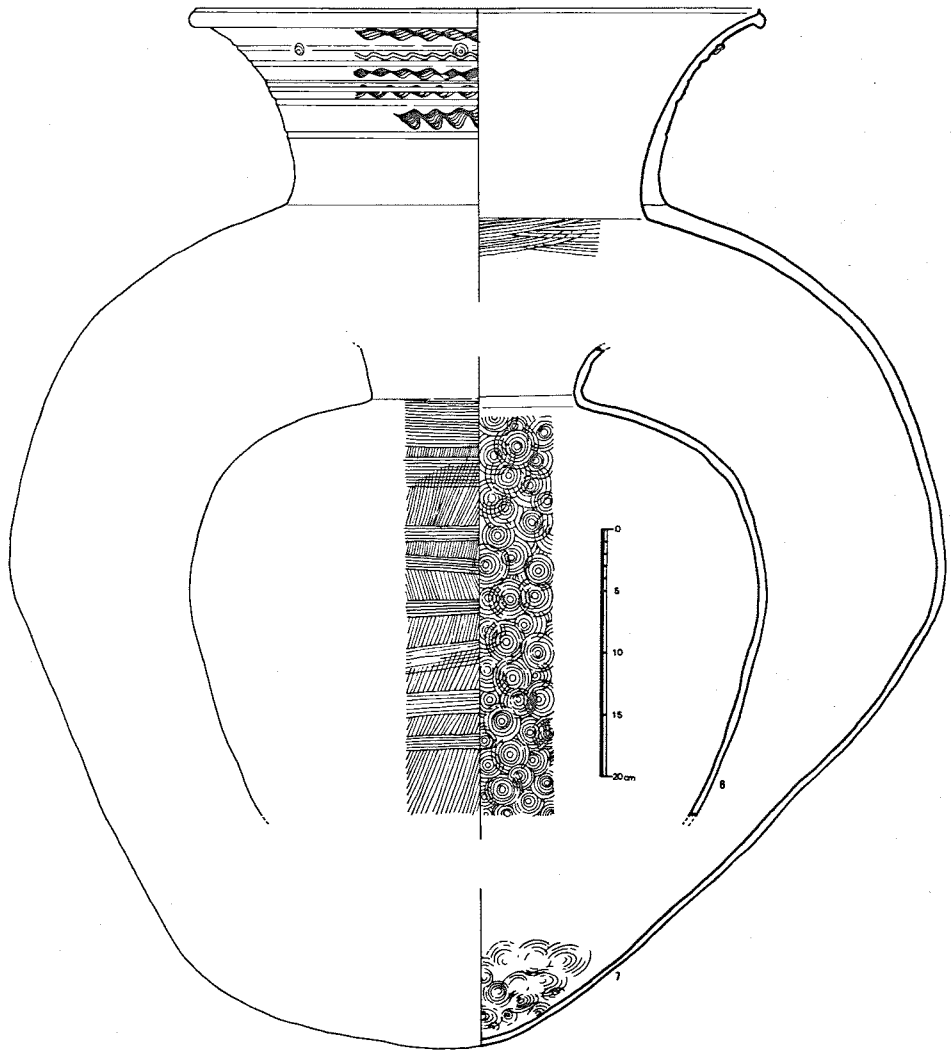
左半でみついているが羨道
(註3)
部上層から発見された土器片
といずれも接合されたりして
いるので、墳丘の完成後に、供
えられたものかもしれない。

1は、小破片のため計測は
できないが、明らかに他の口
縁と異なる。色調は灰色、胎
土に砂粒を含むが、焼きは良
い。

2も、小破片である。6の
口縁となる可能性もあるが、
接合は出来ない。暗灰色。胎
土に砂粒を含むが、焼きは良
い。

3は、口縁部だけ発見され
ている。口径22.4cm、頸部高
3.6cmほどと成ろう。灰黒色
で砂粒を含み、焼きも良い。

4は、7と同じくらい大き



第9図 高崎5号墳出土土器その4 (縮尺6分の1)

土師器

羨道部から、高杯4点分が出土し、杯蓋が、石室右半の平地から発見されている。

高杯 (第6図12・13・16・17) 12 (図版7-11) は、脚部だけ発見されたもので、脚底径11.8cm、脚部高5.5cmを測る。淡赤橙色で、砂粒を含み、焼きは良くない。脚の内側は折れまがる部分の上と下とを大きくヘラ削りし、外側は杯の接合部から下に向ってヘラで磨いている。

13 (図版7-12) は、脚の下半部だけの破片である。脚底径10.7cmほどとなろうか。色調は赤橙色、少量の砂粒を含み、焼きも良くない。内面・外面ともに同様整形がされている。外面はヘラで丁寧に磨かれている。

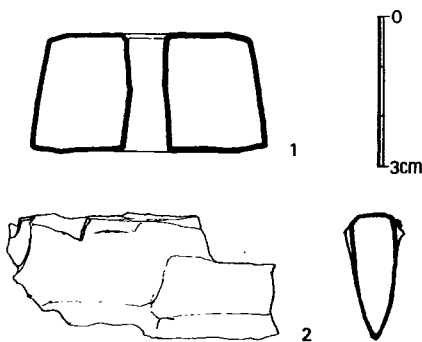
16 (図版7-15) は、完形の土器である。器高9.2cm、口径14.3cm、脚底径11.5cm、杯部高4.4cmを測る。淡い赤茶色で、少量の砂粒を含むが、焼き上がりは良い。杯部の内底はやや荒れているが、内・外とも丁寧にヘラ磨きがされている。脚部は杯の接合から下に向かってヘラで磨き、脚の開く部分は脚柱をかこむ形で、口の字をかくように磨かれている。脚内側は、12・13と同様である。

17 (図版7-16) は、杯の半分と脚の一部を欠いている。器高16.1cm、口径17.1cm、脚底径14.2cm、杯部高4.5cmほどが測られる。赤橙色で、砂粒を含むが、焼きは良い。内・外面のヘラ磨き、ヘラ削りなどは、16と同様である。

蓋杯 (第7図10・11、図版8-5・6) 10は、半分ほどの破片で、口径19.1cm、器高3.2cmを測る。淡い赤橙色で、砂粒を含まず、焼成も良い。内外ともにヘラで丁寧に磨かれている。

11は、3分の1ほどの破片であるが、かろうじて計測できる。器高4.3cmで、口径18.2cmほどとなろう。淡い赤橙色で、胎土、焼成とも10に近い。内面は非常に荒れている。外側は10同様ヘラ磨きである。高台は付け高台である。

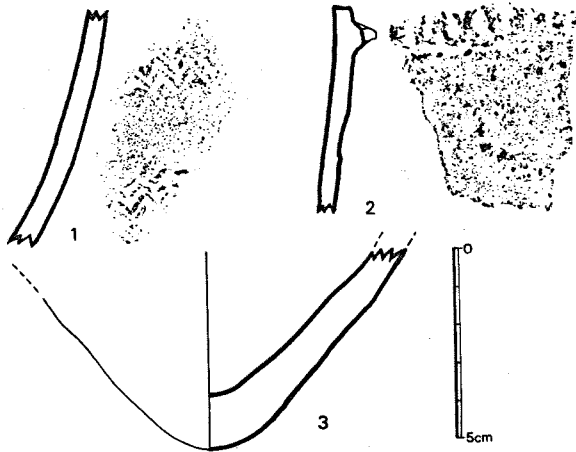
その他の出土遺物 (第10・11・12図、図版8-2) 高崎5号墳からの出土遺物に、羨道部から中粒砂岩製の紡錘車(第10図-1)、石室内から刀の破片(第10図-2)がある。紡錘車は62gほどの重さである。
(註4)



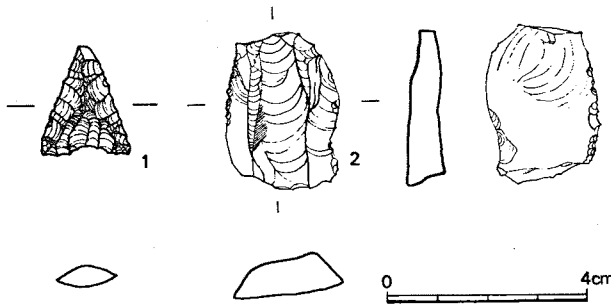
第10図 高崎5号墳出土
紡錘車と刀(縮尺3分の2)

また古墳封土から第11図の縄文式土器と第12図の石器がみついている。第11図1・3は早期の土器で、1には、山形文が押されている。2は、晩期の土器で口縁直下に突帯文が施文されたものである。夜臼式であろうか。

第12図の1・2は、黒曜石である。1の石鏃は、表裏面とも剝離を加えている。扶りが浅く、先端を欠損している²の石刃石器は、先土器時代に属する遺物と思われ、巾2.3cm、厚み0.7cmを示す刃器の頭部である。下方は欠損している。裏面に大きな打瘤がみられ、また表面



第11図 高崎5号墳封土中よりの縄文式土器（縮尺2分の1）



第12図 高崎5号墳封土中より出土の石器（縮尺3分の2）

Ⅱ類 須恵器 碗（第7図4・5）

Ⅲ類 須恵器 長頸壺（第7図12） 土師器 蓋杯（第7図10・11）

なお、この分類のうちⅠはさらに2つに分けることも可能であろう。

須恵器 甕（第8図1・2・3・5、第9図6）のほとんどが、Ⅰ類の新しい方に入るのかもしれない。

註1 小田富士雄・真野和夫・柳田康雄、大浦2号窯「野添・大浦窯跡群」福岡県教育委員会1970

註2 同前

註3 西谷正等「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)」1972のなかにも、鈴ヶ山1・2号墳、山の前古墳群のなかにも、手づくりの土器や甕などが墳丘中や地山の上で発見されており、祭祀が墳丘の完成以前に行なわれていたことが知られている。

註4 西南大学教授唐木田芳文氏のご教示による。

には前回の剥離による打瘤痕を残している。石核に加えられた頭部調整はみられないので、平坦打面の石核から剥離されたものであろう。縁辺に剥離痕（二次加工）が認められる。

以上、高崎5号墳の出土遺物を概観した。

高崎5号墳出土の杯類を小田富士雄氏の須恵器の編年表で見ると、Ⅰ類がⅢb～Ⅳに、Ⅱ類がⅣ～Ⅴくらいに、Ⅲ類がⅤ～Ⅵくらいの時期に比定されようか。

また、この杯の3つの分類に伴うものは次のように整理出来ようか。

Ⅰ類 須恵器 高杯（第6図15）・短頸壺（第6図14）・大甕（第8図2、第9図7）
土師器 高杯（第6図12・13・16・17）

註5 前掲書。および小田富士雄編「立山山窯跡群」八女市教育委員会1972などによる。

3. 高崎6号墳

(第13図、図版9) 大又遺跡の昭和44年の予備調査、さらに今回の本調査にわたり確認されたもので主体部の掘方と一部敷石と思われる小礫が残っている。付図5図のR-7・8、S-7・8、T-7・8にかけて存在するもので完掘はできなかったが、約10mの円墳で、内部主体は高崎1号墳と同じような横穴式石室でも古い方の竪穴系横口式石室の範疇に属するものと推測される。

内部主体の大きさを掘方より復原すると、腰石を置いたとみられる痕跡があると考えられるならば、石室は幅1m、長さ2.5m弱でコの字状に坑内に架構されていたと推測され、土坑は現地山面より約40cmの深さである。この場合石室方向は南西方位でN-56°-Eを指し、高崎3号・4号墳の墓道とかかわりがあるものであろう。

出土遺物は1点も確認できないが、横穴式石室でも古い方に属し6世紀前半代のものかと思われる。

4. おわりに

高崎5号墳・6号墳の報告を終わるにあたり若干の整理を行なってみよう。第1表は「今宿バイパス1」に報告された4基を含めた高崎古墳群の知ることが出来るかぎりの全貌である。墳形は方墳1基で、他はすべて円墳と思われる。

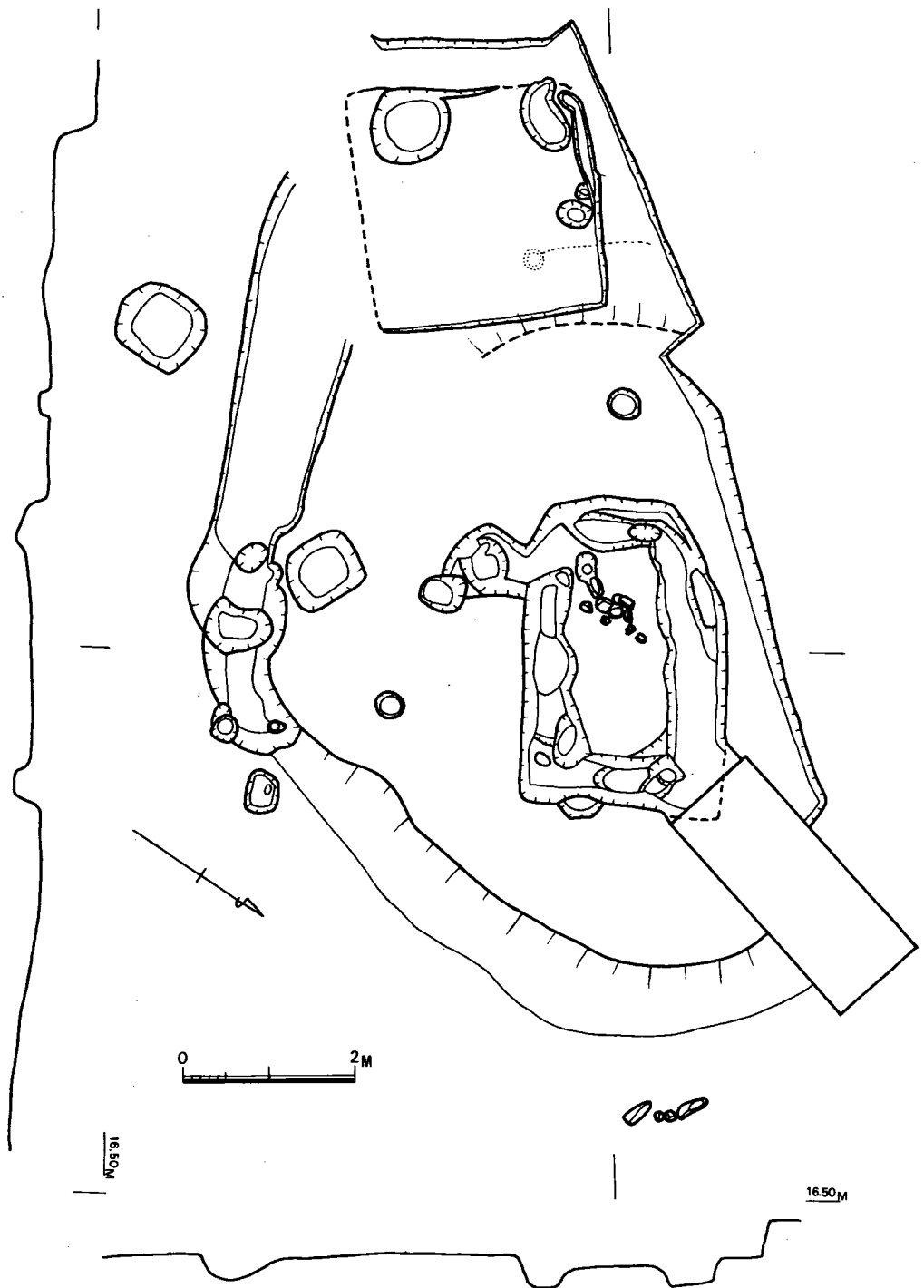
規模も2号墳が1辺15mとやや大きい、他は10m前後のものばかりである。

主体部は横穴式石室で、両袖単室のもの3基、片袖単室1基、竪穴系横口式石室かと思われるもの2基となる。

石材の大小により多少の差を生じているが、伴出の遺物からは、Ⅲ期(6世紀の後半)に、そのほとんどが築造されたこととなろう。「今宿バイパス1」では、1・2号墳がまず築造されたとし、次いで、4号・3号墳と築造されたとしている。今回の結果をこれに合わせれば1・2・6号墳がまず築かれ、3・5号墳と続き、4号墳が最もおそく造られたことになるか。

ただ、5号墳の場合、Ⅵ期(7世紀の後半)にまで、追葬が行なわれた形跡がある。

高崎古墳群では、大化喪葬以後築造された古墳が見つからないが、火葬の習俗が入ってくるまで——早良平野の唯一つの寺院跡、城ノ原廢寺の建立される前後——古墳が造営された



第13図 高崎6号墳平面図（縮尺80分の1）

第 1 表 高 崎 古 墳 群 一 覧 表 (単位: m)

号	墳 形	径又は1 辺の長さ	石				室			石材	出土 遺物	時期	備 考
			形 式	主軸の傾き	全長	玄室長	玄室巾	羨道長	羨道巾				
1	円 墳		縦 穴 系 横口式石室?	N-68°-E	2.7?	2.7?	0.8		花 崗 岩	須恵器片 1 鉄 鏃 2	Ⅱ └ Ⅲ		
2	方 墳	約15	横穴式石室 (両 袖 室)	N-89°-E	9	3.7	2.4 └ 2.5	5.3	1.2	花 崗 岩	須恵器(160個 体分) 土師器 人骨・青磁 鉄製品・玉類	Ⅲ	。南側に竊状遺構 。有蓋足付壺出土 。単鳳透彫りの金銅張 環頭
3	円 墳	9	横穴式石室 (両 袖 室)	E-32°-W	9.3	2.1	2	3.7	1.6 └ 2	花 崗 岩	須 恵 器 鏃 須 鉄	Ⅲ	
4	円 墳	10	横穴式石室 (片 袖 室)	N-52°-W	6	2	2~1.7	4	1.3	花 崗 岩	須 玉 器 類	Ⅳ	
5	円 墳	13	横穴式石室 (両 袖 室)	N-37°-E	7.28 └ 8.19	2.71	1.64 └ 1.79	3.4 └ 5.4	0.9 └ 1.0	花 崗 岩	須 恵 器 刀 車 須 土 鉄 紡	Ⅲb └ Ⅵ	
6	円 墳	約10	縦 穴 系 横口式石室?	N-56°-E	2.5?	2.5?	1.0?						

可能性は残るものと思われる。現に、佐賀県東十郎古墳群のなかには、奈良時代に築造されたものもあると言う。^(註1)

次に立地の条件からすると、1・2号墳をひとかたまり、3・4・6号墳をひとかたまり、5号墳をひとつに数えれば3つの小丘陵の上や傾斜面に、1基～3基ずつ3群の古墳が築造されていることになる。この型は西谷正氏の言われる円墳―円墳群―群集墳という型に適合するものである。^(註2)

また、3群の古墳は、それぞれ谷ぞいに北に向かってハカミチがつけられていたであろうとしか考えられない地形条件である。大又遺跡に生活した人々のうち1・2・6・8号の住居に居住した人々は、この古墳群を築造する可能性があるが、私はこの人々を含むにしても、古墳群の北側の平野部で水田を耕作し得た人々の墓地と考える。この一証拠として、下山門遺跡(仮称)は現在の海岸線より約400mほど内陸で、高崎古墳群から約1.2kmほど離れている遺跡であるが、須恵器Ⅲの時期には、海岸砂丘の平野一帯でも、ある程度の水田耕作がなされていた可能性がある。^(註3)

高崎古墳群を築造した人々の居住した場所は、現在の城ノ原の集落にもとめるのが妥当かと思われるが、ここも近年の異常なほどの建築ブームで調査の可能地はほとんど失なわれた。

註1 喜谷美宣後期古墳時代研究抄史「日本考古学の諸問題」考古学研究会十周年記念論文集1964、このなかであつかわれている論文檜崎彰一氏の考え方「大化喪葬令は畿内を中心とした1部の地域に対して通用したにすぎない。」

当然九州においても通用するものであるが、早良平野ではこの問題を解決するには、資料の増加をまたねばならない。高崎5号墳を造った人々の場合、古墳の築造は終焉していたかもしれないが、墓地としてその後も使用していた事例のひとつと言えようか。

註2 「東十郎古墳群」佐賀県教育委員会 昭和41年

註3 西谷正 九州考古学の諸問題 IV古墳時代「考古学研究73」

註4 三島格・山崎純雄ら、福岡市教育委員会で1972年に調査された遺跡で両氏のご教示によるところである。

この遺跡では須恵器杯Ⅲに伴なって多くの木製品が出土している。

第 3 大 又 遺 跡

福岡市西区拾六町所在古墳時代集落跡の調査 その2

本文目次

1. はじめに	27
(1) 調査の経過	27
(2) 遺跡の立地	27
(3) 発掘区の設定	28
2. 遺構と遺物	29
(1) 3号住居跡	30
(2) 4号住居跡	30
(3) 6号住居跡	35
(4) 7号住居跡	35
(5) 8号住居跡	35
(6) 土 壇	35
(7) 竪穴状遺構と祭祀遺物	37
(8) 各グリット出土の遺物	40
3. 結 び	44

第 3 大 又 遺 跡

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

福岡市西区大字高崎1108番地に所在する大又遺跡は、既に1969年（昭和44年）9月4日から同年10月4日まで予備調査が行なわれ、その報告書として『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集1970年（昭和45年）3月が公にされている。

今回の発掘本調査は1971年（昭和46年）9月7日から10月15日までの39日間にわたり実施したもので、調査地域は予備調査の成果に基づいて遺跡全体を把握するために全掘を試みたのであるが、地主の問題により一部発掘を断念して高崎6号墳は完掘には至っていない。

大又遺跡の調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課	課長技術補佐	渡 辺 正 気
	調査係長	藤 井 功
	技 師	栗 原 和 彦
	”	柳 田 康 雄
	”	上 野 精 志 (担当者)

以下調査日誌により、調査工程を抜粋する。

9月7日～9月9日 遺跡地周辺の伐採を行ない、予備調査を踏襲したグリットを設定し、合わせて遺跡遠景写真撮影を行なう。

9月11日～9月28日 グリット方法により発掘を開始し最終的に予備調査を含めて全面の表土除去作業。

9月29日～10月7日 遺構検出及び遺構の写真撮影。

10月8日～10月12日 遺構実測。

10月13日～10月15日 埋め戻し作業を完了し、現場作業を終了する。

(2) 遺 跡 の 立 地 (第2図、図版10)

遺跡地は遠く1.4kmに玄界灘が今津（福岡）湾を臨み背振山地が北方の海岸に向かって一番近

く直面した叶岳 (341m) から長垂山 (118.5m) に続く低山麓地より多くの小台地が派生し、東方に突出した支脈である低台地上 (下位砂礫台地) に位置し、白垂系の深成岩からなる花崗岩層からなり黄色土壌を呈している。

国鉄筑肥線の「姪の浜」駅とその西方「今宿」駅のほぼ中間あたりより、南方の低台地に向けて 900 m 付近にあり、国道 202 号線 (福岡—唐津) よりも約 1 km の付近に位置するものである。

遺跡地の後方には生の松原ゴルフ場があり、また付近には新興団地ができ付近の環境は一変している。大又遺跡はこのような低台地上に存在するが、両谷を挟んで東方の同一丘陵上には高崎 1 号・2 号墳が近接して築造されており、西方の丘陵中には高崎 3 号・4 号墳がやはり近接してあり、さらにその 1 つ越えた丘陵上に高崎 5 号墳が位置し、大又遺跡とともに存在する高崎 6 号墳を含めて高崎古墳群を形成している。この小低台地は、標高 18m~16m を測り、最高位との比高は約 3 m を有して、北方に 100 m 延びて東西の幅 20m~30m の範囲である。この低台地の両側は近世の開墾によりかなり削平されていると思われ、特に遺跡の東端部の 8 号住居跡・4 号住居跡・6 号住居跡付近はいずれも破壊されており、谷間は西方と同じく北方に位置していたものと思われる。またこのことは高崎 6 号墳が既に内部主体をなくして、掘方のみであったことからもうかがわれる。

(3) 発掘区の設定 (付図 5 図)

予備調査に基づきグリット原点 (P-7) として南北軸を N-14°-E、東西軸を N-76°-W とし、3 m を一辺として発掘区域を拡大した。南北軸は南に向けて G~Z、東西軸は東より西に向けて 4~18 に区分した。地区記号は南東隅を基点として表現することとする。

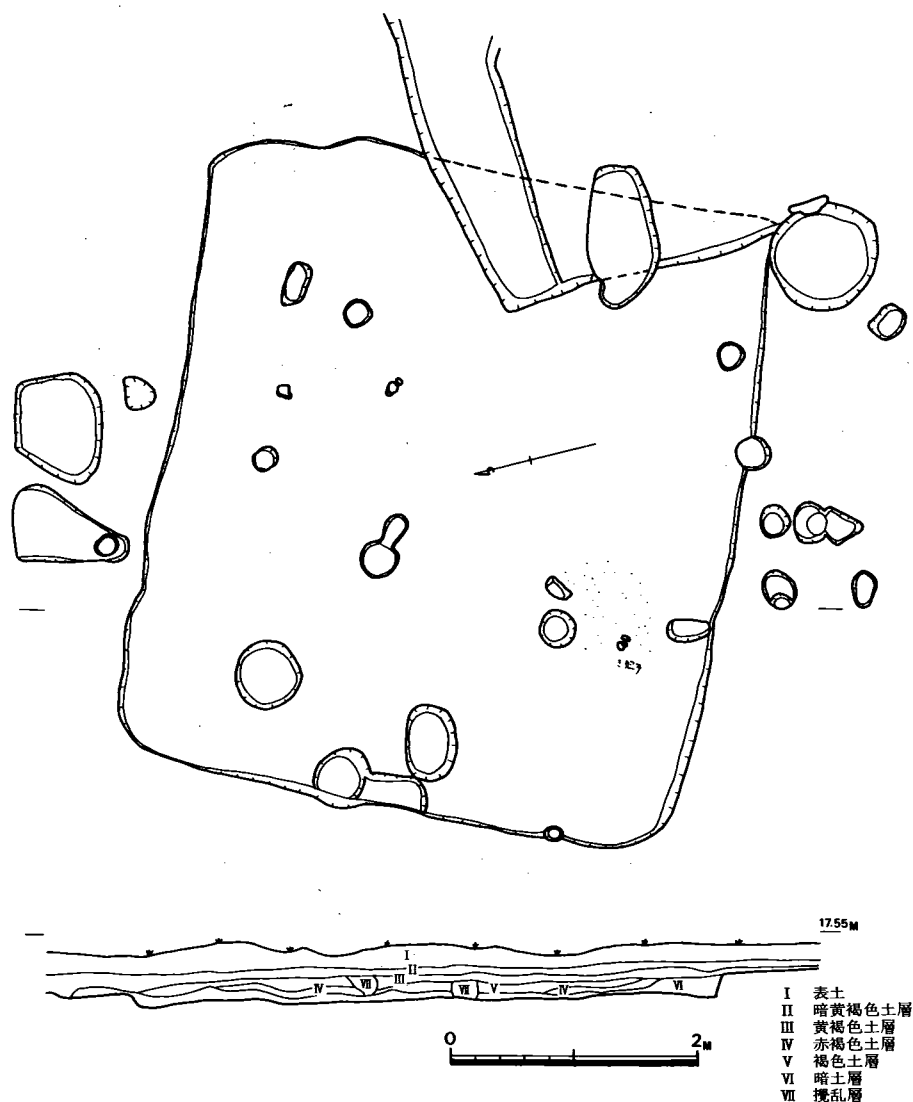
なお、前回と今回における発掘調査の対比は下記の表のとおりである。

第 2 表 大 又 遺 跡 調 査 対 照 表

No.	前回	今回	形 態	大きさ (m)	壁 高 (cm)	柱穴	炉	出 土 遺 物	須恵器編年	備 考
1	完掘		方 形	4×4	50~60	なし		土師器壺、須恵器坏	Ⅱ	
2	完掘		長方形	3.5×5	10	2	有	土師器、須恵器、石器	Ⅲ	
3	半掘	完掘	方 形	4.6×5.1	20	不明		土師器壺、須恵器坏	Ⅲ~Ⅳ	
4	半掘	完掘	方 形	4×4	50	不明	有	土師器、須恵器、石器	Ⅱ~Ⅲ	張出し
5	完掘		方 形	3×3	15	不明		土師器、須恵器、石器	Ⅲ	
6	半掘	完掘	方 形	4×4	10	4?		土師器壺、須恵器坏	Ⅱ	
7		完掘	長方形	3×5	30	不明	有	弥生式土器	弥生後期	
8		完掘	長方形	3×?	50	2?	有	土師器、須恵器坏	Ⅲ	

2. 遺構と遺物

本遺跡はすでに予備調査の成果により古墳時代の住居跡6基や近世の家屋土台と思われる配石遺構、その他掘立柱遺構が検出されている。今回あらたに弥生時代住居跡1基、古墳時代住居跡1基その他土壇、さらに前回調査においてS・T-7区の方形溝を拡張した結果すではほとんど破壊された古墳を確認し、高崎6号墳とした。その他古墳時代の土壇や、祭祀遺物を出土する竪穴状遺構である。以下遺構、遺物について詳細な報告を行なう。



第14図 大又遺跡3号住居跡実測図（縮尺60分の1）

(1) 3号住居跡 (第14図、図版11)

遺構 本住居跡の所在範囲はL-7・8・9、M-7・8・9区となっている。今回L-9、M-9区を拡張発掘調査し住居跡の完掘を行なったものである。この住居跡は2号住居跡の西に位置して、現地表下40cmにあってこの間における充満土は表土20cm、暗黄褐色土層5～10cm、黄褐色土層5～10cm、レンズ状をした褐色土層9cm、赤褐色土層5cm、暗褐色土層5cmからなっている。

平面プランは東西5.2m×南北4.5m、床面積23.4㎡の方形であり、床面主軸方向はN-60°-Wを指している。壁は北壁が若干低く、壁高は10～20cmを測り、傾斜は20°の立ちあがりである。床面は地山の黄褐色土層を固めたものであり全体的に平坦である。周溝は存在しないが、壁直下の床面がやや周溝的にくぼんでいる。柱穴は不明であり炉も判明しない。床面標高17.00mである。

遺物 今回調査の本住居跡出土遺物は僅少で器形の判明するものがなく図示できないが土師器、須恵器がある。土師器にはこしき把手が出土している。これは1個のみであるが火をうけていて赤褐色を呈している。

予備調査の折には土師器甕と須恵器坏蓋の出土をみており、須恵器は第IV型式に比定されている。

(2) 4号住居跡 (第15図、図版12)

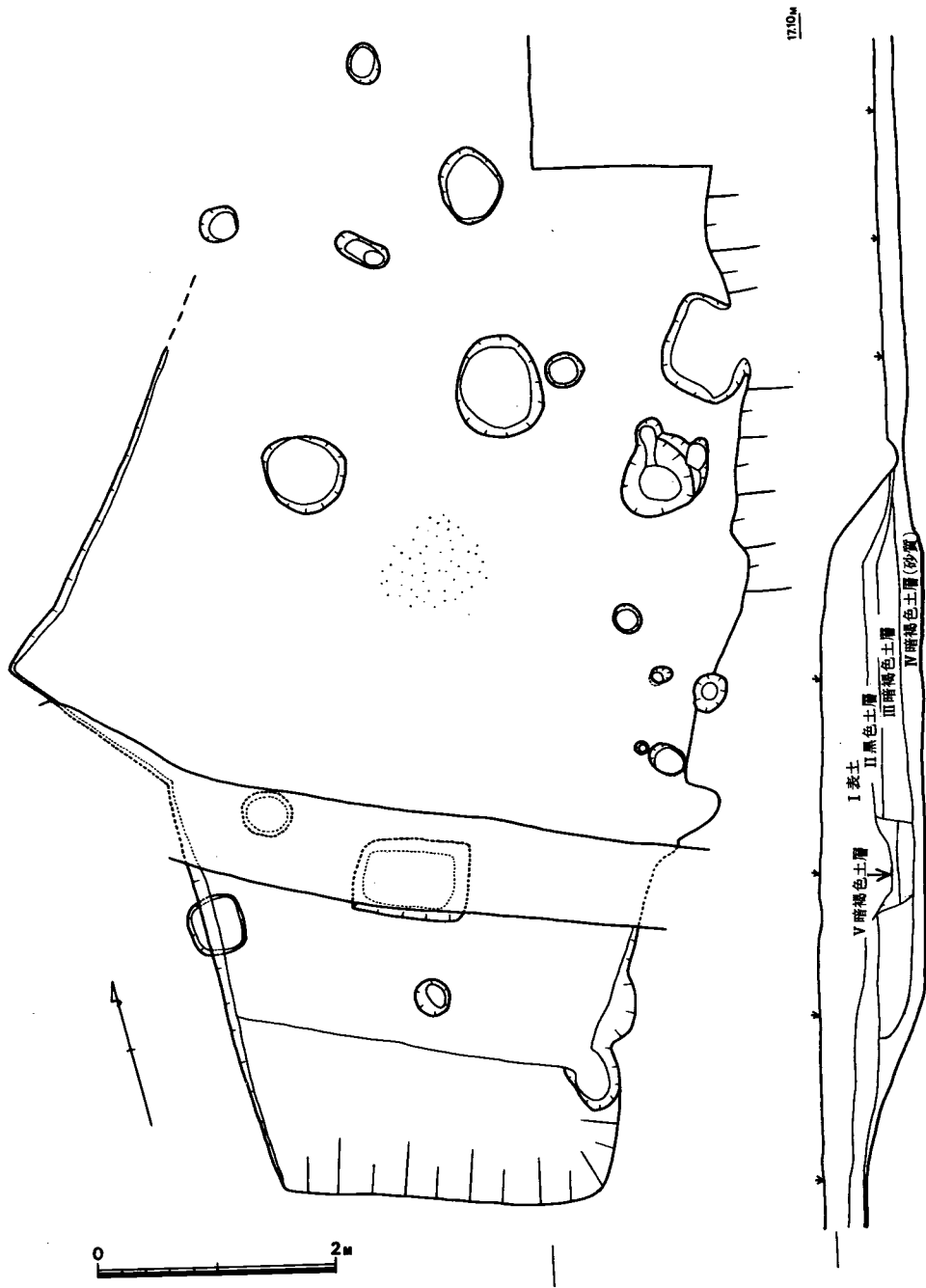
遺構 本住居跡の所在範囲はK-5・6・7、L-5・6・7、M-5・6・7、N-6区にあって、今回K-5、L-5、M-5区を新たに拡張発掘した。この住居跡は2号住居跡の東に位置し、現地表下90cmにある。

平面プランは一辺4mほどで、床面積16㎡の方形になるものと思われ、その付属施設として南側に張り出し部がある特異な平面形を呈している。主軸方向はN-38°-Eを指していて、今回調査の東南部は攪乱を受けて壁は明白にはとらえられない。また、柱穴も多数あるが主柱となるものは不明である。

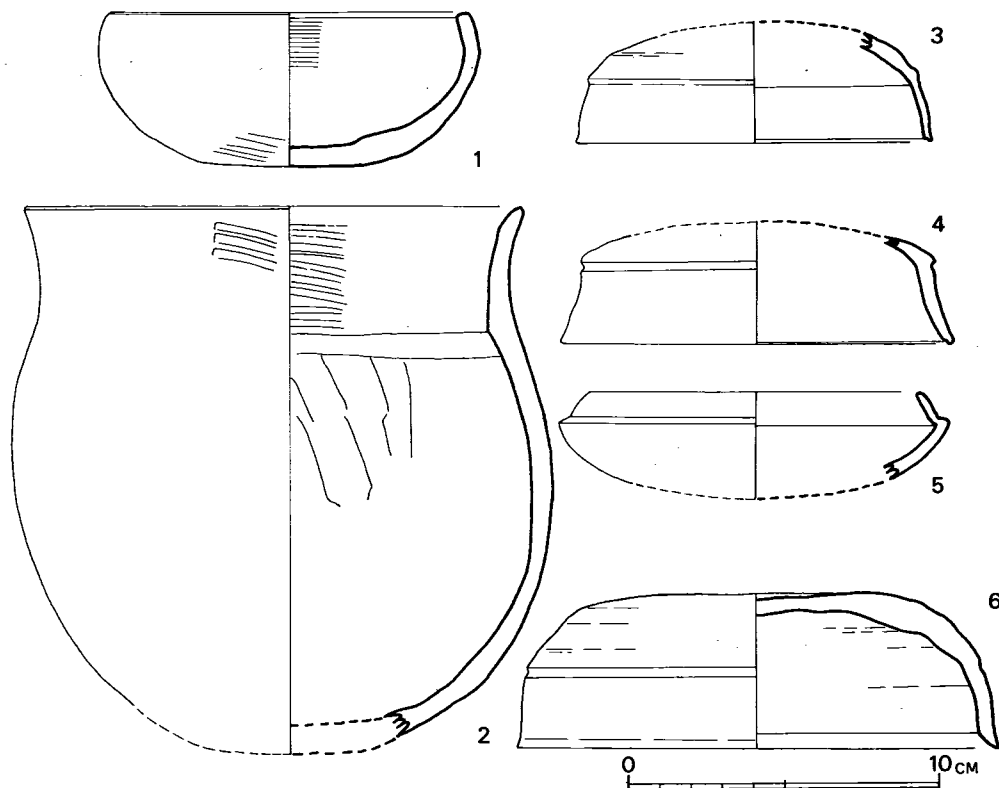
遺物 (第16図、図版13) 本住居跡出土の遺物は他の住居跡よりも多く出土していて土師器甕・坏・盃や須恵器坏が出土している。

1は、土師器盃で口径11.5cm、器高5cm、厚さ0.8cmを測り、口縁部が内反して端部を平坦に仕上げている。胎土中には0.5mm大の砂粒が混入されており、器面は滑らかにつくられていないが、その上に粗いハケ目を施している。色調は内面黒灰色で、表面一部白橙色を呈し、焼成は不十分である。

2は、土師器甕で口径15.5cm、器高17.5cmを測るものと思われ胴部下半を欠損している。頸



第15図 大又遺跡4号住居跡実測図(納尺60分の1)



第16図 大又遺跡4号住居跡出土土器実測図(縮尺5分の2)

部より直立し口縁部にかけて外反し口縁端部が太く丸い。口縁部の内外面にハケ目を、胴部内面にヘラ削りを施している。色調は内面黄褐色で、表面は火をうけたらしく一部欠損していて煤が付着し赤褐色を呈している。胎土に大粒の砂を含み焼成は良好である。

3は、須恵器坏蓋で天井部を欠いているが体部に丸く続き、肩部に段を有し口縁部が外反して、その内面に一条の段をめぐる。口径11.3cm、器高約4cmで色調は青灰色で胎土緻密、焼成良好である。表面には焼成の際に灰釉をうけており、第ⅢA型式に比定できる。

4・5は、いわゆる模倣須恵器の範疇に入るものでセットになるものである。4は口径12.5cm、器高約4cmを測り、肩部に沈線をめぐらして口縁部にかけて大きく外反し、端部内面に段を有する。内外面ともに丁寧なヘラ磨きの調整を施している。5は口径10.5cm、器高約3.5cmで底部より丸味を帯びて受部に続き、たちあがりは1cmで直線的に傾斜が強く内傾する。受部は平坦で短かく太い。4と同じく丁寧なヘラ磨き調整である。4・5ともに色調は茶褐色で胎土緻密、焼成良好である。内面に黒色化処理をしている。

6は、須恵器坏蓋で口径15.3cm、器高3.8cmで、天井部より丸味を帯びて肩部に一条の沈線が有り体部にはぼまっすぐに下り、口縁端部が外反して断面三角形を呈し先端部は尖る。色調は青

灰色で胎土中に大粒の白砂を含み、焼成は良好である。つくりは天井部はヘラ切りで、内面は渦巻状の凹凸が残り、体部は横ナデを施している。第ⅢA型式に属する。

(3) 6号住居跡 (図版12)

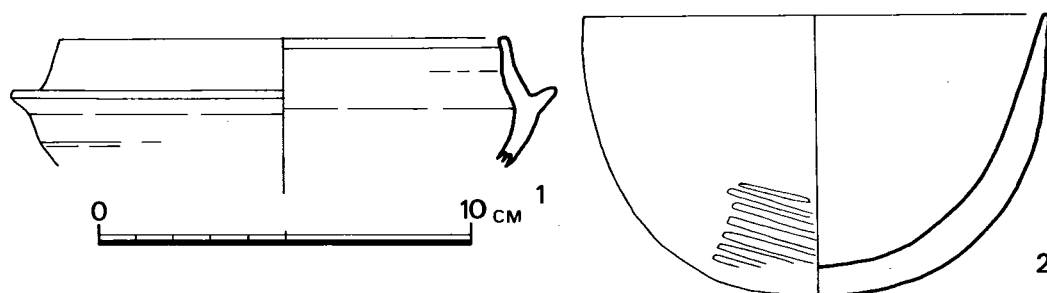
遺構 本住居跡の所在範囲はG-5・6、H-5・6、I-5・6区にあってG-5、H-5、I-5区を新たに拡張発掘した。この住居跡は1号・5号住居跡の南にあって、5号住居跡と切り合い関係にあり、5号住居跡より新しい。現地表下20~30cmにある。

平面プランは4m×4mの隅丸方形と推定されるが4号住居跡と同じく南東部が攪乱をうけて詳細は判明せず、柱穴も数多く存在するが主柱の組合わせは不明である。

遺物 (第17図、図版13) 本住居跡よりの出土遺物は土師器甕・埴、須恵器杯・甕類である。

1は、須恵器杯身で底部を欠損しているが、口径12cm、器高約4.5cmで体部は丸味を帯びて、たちあがりは1.5cmで直線的に内反してたちあがり、口縁部にかけて直立になる。受部は外反し太く、先端部は先尖り気味である。色調は白灰色で胎土緻密、焼成不十分である。たちあがりが高く器高も深いことにより、古式の特徴を備えており第Ⅱ型式でも古い方に属する。

2は、土師器埴で口径12.5cm、器高7.5cmを測り底部丸底より外反してほぼ直立にたちあがり、口縁端部は平坦である。底部表面に斜めのヘラ調整がみられる。この土器は火を強くうけており底部中央は黄橙色で、その周りから胴部にかけて赤褐色を呈している。胎土中に若干の砂粒を混入している。



第17図 大又遺跡6号住居跡出土土器実測図(縮尺2分の1)

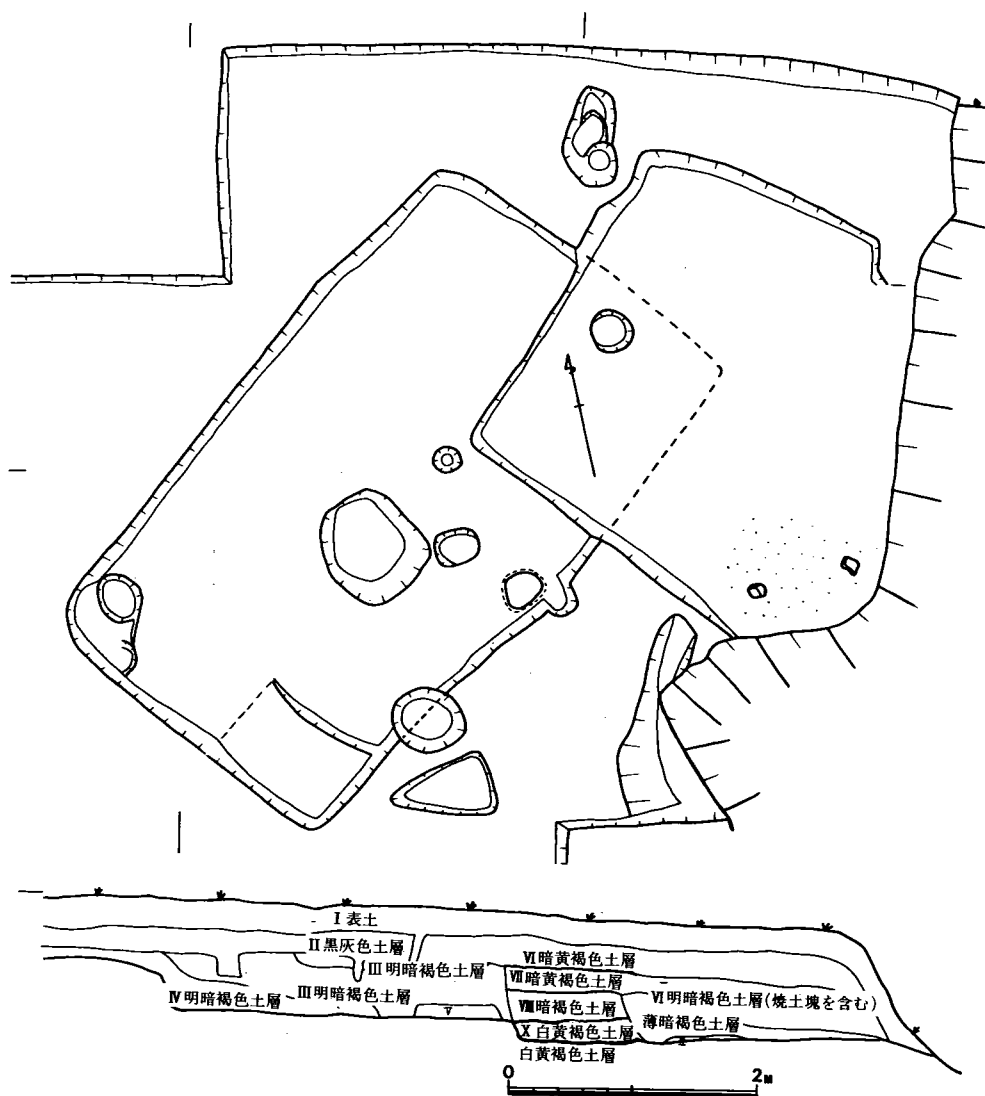
(4) 7号住居跡 (第18図、図版14)

遺構 本住居跡の所在範囲はW-6・7、X-5・6・7、Y-5・6区に存在する。住居跡では台地の最も北に位置して、現地表下90cmにありこの間における充満土は表土20cm、黒灰色土層20cm、レンズ上明暗褐色土層10cm、暗褐色土層25cm、黄褐色土層15cmからなっている。

平面プランは一辺5m×3mの長方形で、床面積15㎡を有し、主軸方向はN-49°-Wを

指している。壁は四方共に同高で壁高40cmを測り、北壁は一部地山の礫層を利用して非常にもろい。傾斜は20°の立ち上りである。床面は全体的に平坦である。周溝は存在せず柱穴は不明である。南西隅に床面より一段高いベット状遺構のようなものが存在する。住居跡中央の径70cm、深さ40cmの円形ピット内に多量の灰層が堆積している。

遺物 (図版15) 本住居跡の出土遺物は僅少でしかも細片であるため図示できるものはない。1個体ではあるが弥生時代の後期に属する甕の出土をみた。



第18図 大又遺跡7・8号住居跡実測図(縮尺60分の1)

(5) 8号住居跡 (第18図、図版14)

遺構 本住居跡の所在範囲はX-5・6、Y-5に存在する。この住居跡は西方の7号住居跡と切り合っており本住居跡の方が新しい。現地表下95cmに在って、この間に於ける充満土は、表土20cm、黒灰色土層20cm、暗黄褐色土層15cm、明暗褐色土層(焼土塊を含む)35cm、暗褐色土層35cm、やや暗い暗褐色土層15cm、白黄褐色土層5cmからなっている。

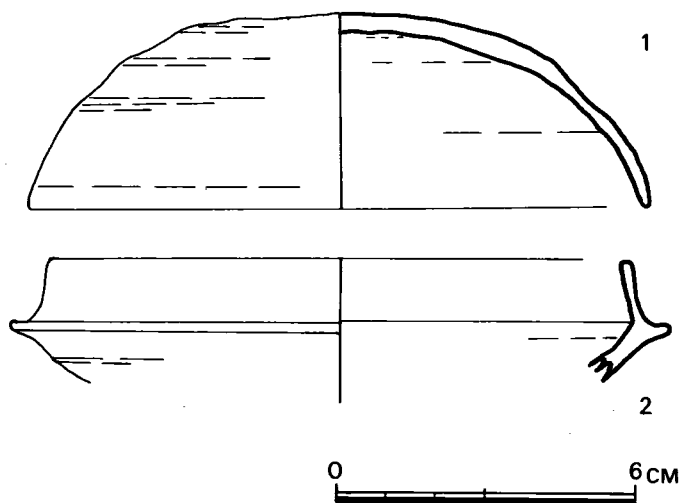
平面プランは一辺6m×5m以上の矩形と推定され、南東方の壁は破壊され不明である。主軸方向は7号住居跡と同じくN-42°-Eを指している。壁は三壁共に50cmを測り、傾斜は22°の立ちあがりである。周溝は存在しない。柱穴が西北壁側に1本認められ、おそらく対応して南東側に1本あり、2本柱と推定される。柱穴の大きさは34cm、深さ16cmを測る。焼土と火を受けた拳大の川原石が南西方にあり炉と推定される。

遺物 (第19図、図版15) 本住居跡の出土遺物は覆土中にて少量、床面上にて若干の土師器片、須恵器片が出土したのみである。

1は、須恵器坏蓋で口径12.3cm、器高4cmを測り、天井部より丸味を帯びて体部より大きく外反して口縁部とつながる。口縁端部は丸く細い。

2は、須恵器坏身で底部を欠損して口径11.5cm、器高約3.5cmを測る。たちあがりは1.2cmでやや内反していて口縁端部は平らであり受部は平坦で短かく、先端部は丸く太い。1・2ともに色調は灰色を呈し、胎土は密で、焼成は良好である。整形は1の天井部は表面ヘラ切り、内面ナデ、体部は横ナデを施している。

1は第IV型式に、2は第ⅢB型式に比定できる。

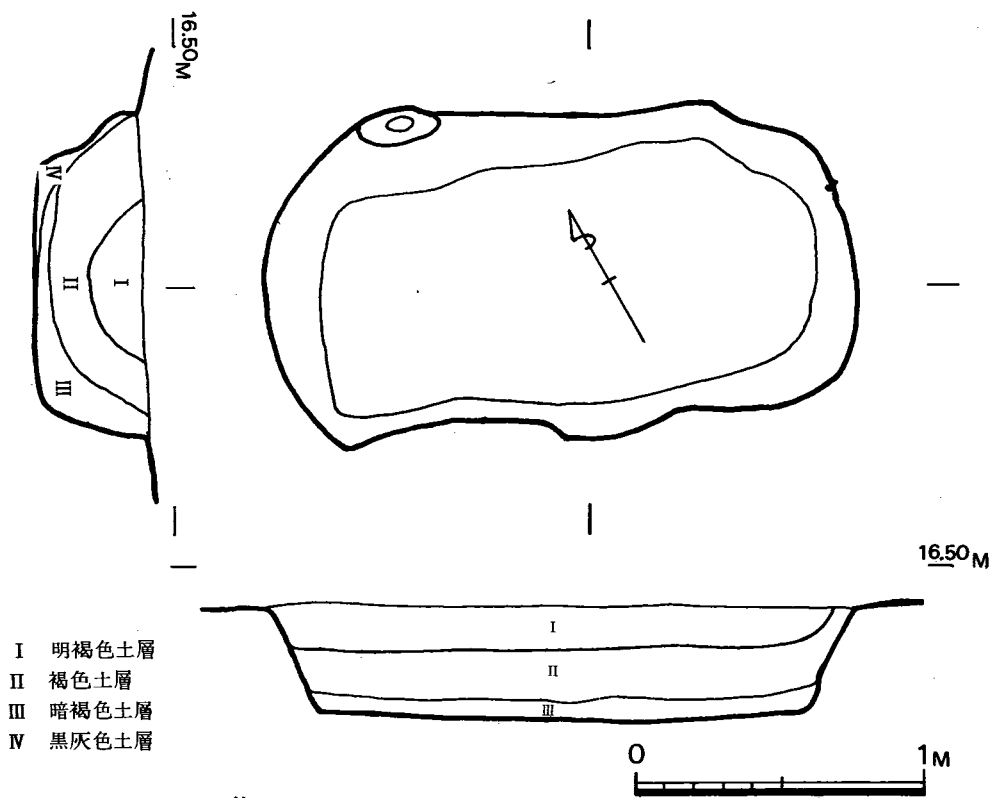


第19図 大又遺跡8号住居跡出土須恵器実測図(縮尺3分の2)

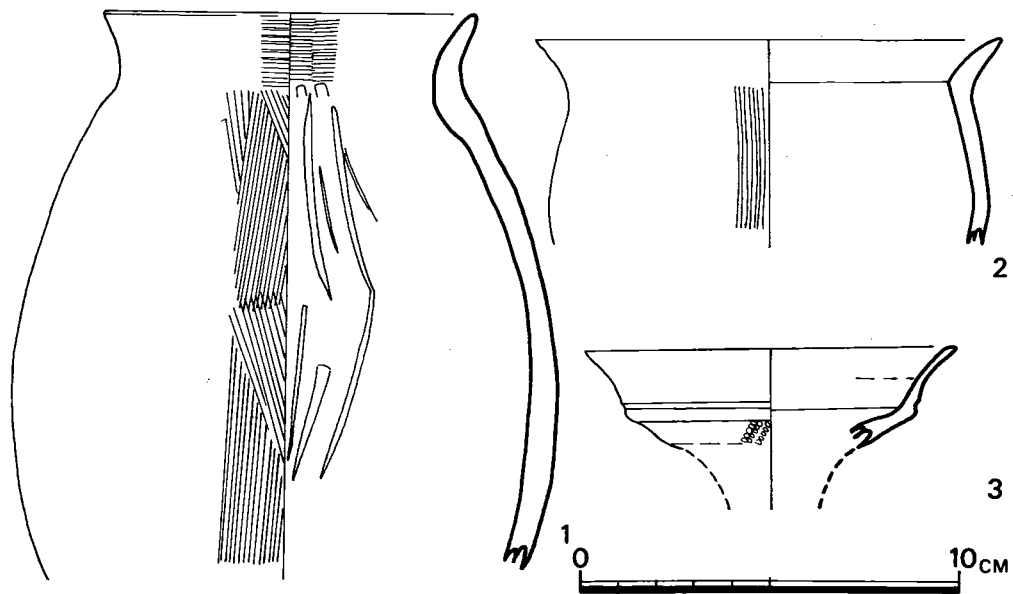
(6) 土 塚 (第20図、図版16)

Q-6区に位置するので隅丸方形の大きさは長さ2m、幅1.1m、深さ40cmである。土塚内の充満土壌は明褐色土層20cm、褐色土層10cm、暗褐色土層5cm、黒灰色土層5cmである。土塚内よりかなりの土器片や磨石、川原石や礫石の出土をみた。

遺物 (第21図、図版15) 1は、土師器甕で底部を欠損している。口径9.5cmを測り、



第20図 大又遺跡Q-6区土坑実測図(縮尺25分の1)



第21図 大又遺跡土坑出土土器実測図(縮尺2分の1)

口縁部は1度直立して緩く外反し口縁端部は丸い。胴部内面にヘラ削りの調整で、表面には楯目による調整で口縁内外面にも施している。

2は、土師器の小形甕で、口縁部はくの字状に外反する。1・2ともに色調は黄橙色を呈し、胎土中に若干の小粒石を混入している。

3は、須恵器甕の口縁部でラッパ状に外反して、再び内に反りつつ大きく外反して、端部は丸味を有する口唇下に一条の沈線がめぐり、沈線部と胴部との接合部の間に楯押圧による斜文を施している。色調は青灰色で胎土緻密、焼成良好である。

(第26図一5、図版19一5)は、砂岩製凹石で半欠品である。

(7) 堅穴状遺構と祭祀遺物 (第22図、図版16)

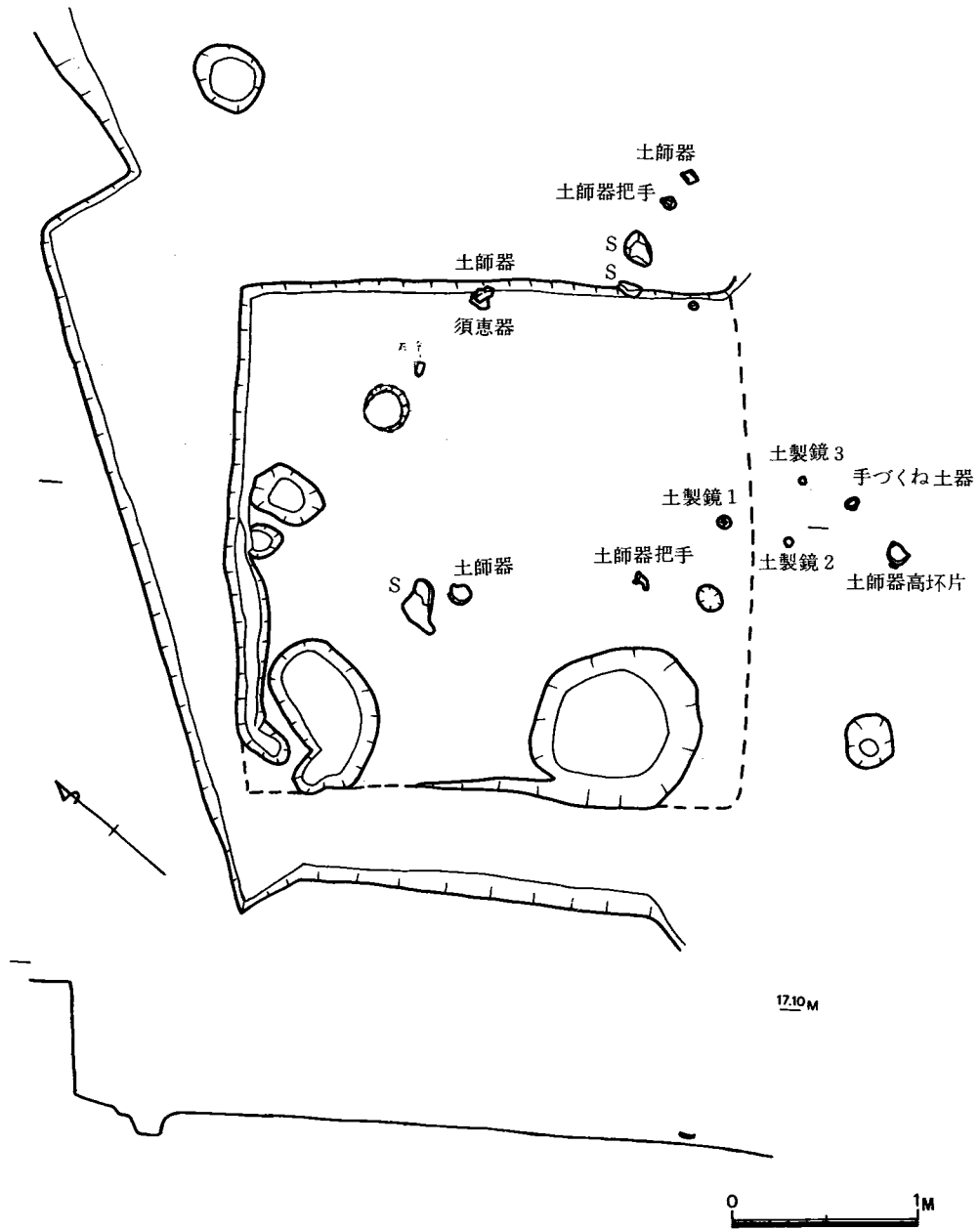
高崎6号墳と重複しているが、切り合い関係により古墳より新しい。祭祀遺物である土製(模造)鏡や手づくね土器で祭祀用としての土器類の埴が一括してQ-8区、P-8区より出土している。Q-8、P-8区にかけて方形の2.8m×2.8mの堅穴状遺構が存在するが、これは東南方が不明瞭で西北方と東北方には壁が存在している。一応祭祀場として把握することができよう。壁は非常に低く5~10cmでほぼ直立に立ちあがっている。床面はほぼ平坦で柱穴として把握できるピットは存在しない。ほぼ中央部分に10cm大の川原石を床面直上にみる。焼土は別に判明しない。祭祀遺物の出土状況は東南に集中していて床面よりは若干高く浮いていて、種類としては土製鏡4、手づくね土器3で滑石製品の出土はみない。また付近より土師器高坏・甕やこしきの把手、須恵器甕片が出土しており、これらは祭祀用の土器と推測できる。またI-5区の6号住居跡外に土製鈴鏡1個が出土している。

出土遺物 (第23図、図版17) Q-8区に一括して出土した土器類を含めて祭祀用として取り扱う。

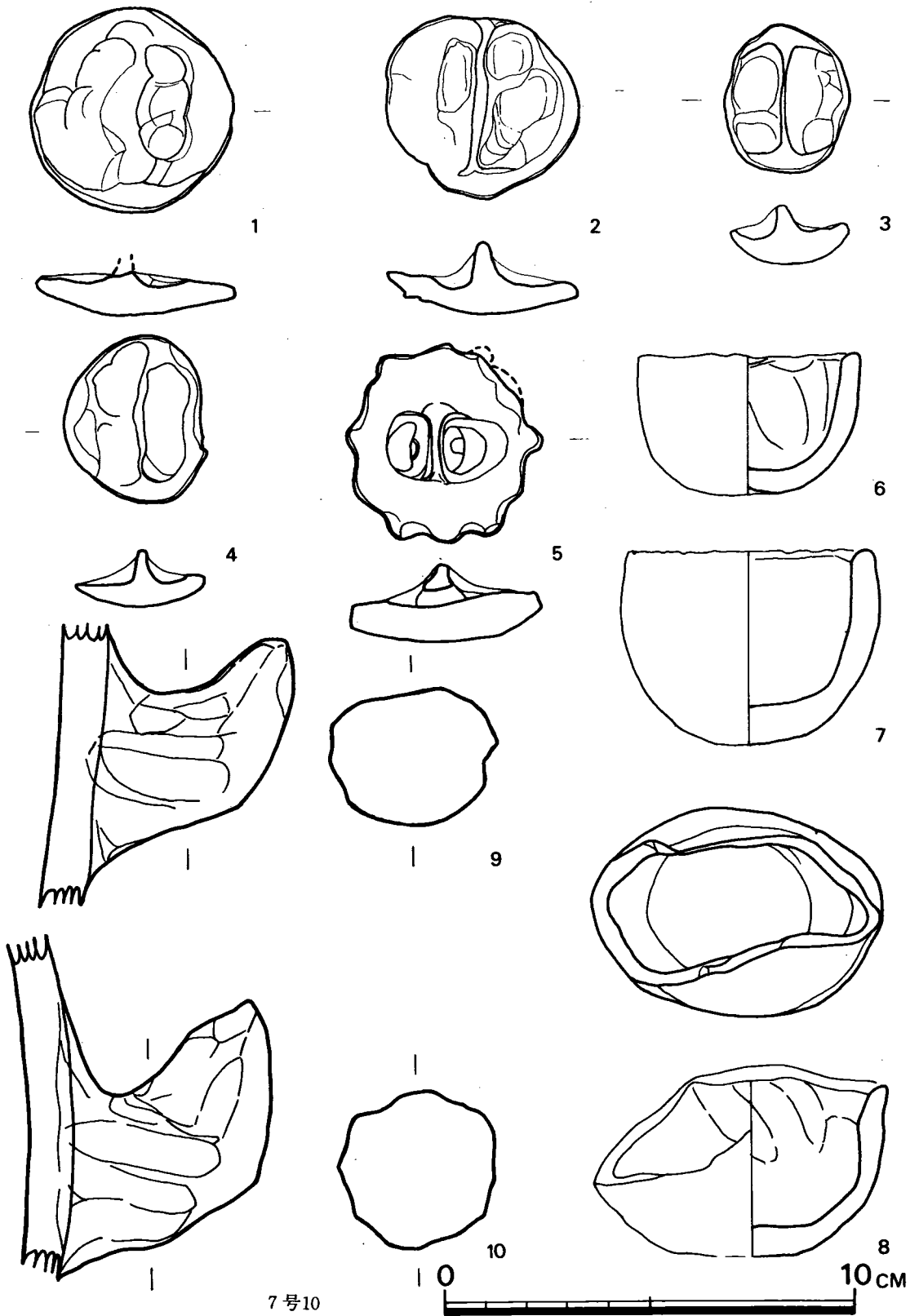
土製鏡 1は、径5cm、鈕は破損していると思われる。厚さ1cm、ソリ0.4cm、縁の厚さ0.3cmの凸面鏡である。鏡面は指先で調整した痕が明瞭に残っており、その時の指紋まで付着していて、やや凸凹に仕上げられている。背面は4本の指の腹で鈕をつまみ上げたものであろう。縁は中央より薄くなっており、断面コの字状である。

2は、径4.7cm、厚さ0.7cm、鈕までの高さ1.7cm、ソリ0.5cm、縁の厚さ0.1~0.3cmの凸面鏡である。鏡面は滑らかであるが一部爪の押圧痕が施されている。背面は3本の指の腹により鈕をつまみ上げており、ほぼ背面の幅につまみ上げている。縁帯はコの字状と先尖がり気味の個所があり一様ではない。

3は、たて3.6cmと横3.1cmの楕円形状で背面縁が大きく反っている。厚さ1cm、鈕までの高さ1.5cm、ソリ0.8cm、縁の厚さ0.25cmの凸面鏡である。鏡面は指先で丁寧に作られていて滑らかであり、背面は3本の指の腹で強く仕上げられており、たちあがっている。1・2に比べて円形ではなくやや小形である。



第22図 大又遺跡 竪穴状遺構と祭祀遺物出土状態実測図 (縮尺40分の1)



第23図 大又遺跡出土祭祀遺物実測図（縮尺3分の2）

4は、P-8区出土のもので縁と鈕の一部を欠損している。3と同じく楕円形状でたて4.1cm、横3.4cm、厚さ0.9cm、ソリ0.5cm、縁の厚さ0.25cmでコの字状を呈す。鏡面は比較的丁寧に作られていて滑らかであり、背面は2本の指の腹で押圧して鈕をたちあがらせている。

5は、I-5区出土の土製六鈴鏡である。径4.2cm、厚さ0.9cm、鈕までの高さ1.9cm、ソリ0.4cm、縁の厚さ0.4cmでコの字状を呈して、鈕の部分には径0.4cm、長さ1.2cmの孔があり、鈕の張り出し部を含めると鈕径1.8cmを測る。六つの鈴にあたるものは鏡の縁を各々の指の腹で作り出したもので、正確には鈴の形を示していないが類例より六鈴鏡とわかる。鏡面は指の腹で調整されており滑らかに仕上げられている。背面には前述のような鈕が付き、これは2本の指でたちあがらせて孔を穿けたものである。

手づくね土器

6は、手づくね土器の埴で口径約5cm、器高約3.5cm、器厚0.5cmで丸底より直立してたちあがり口縁端部は丸い。内面に指の腹による指圧痕があり比較的丁寧に仕上げられている。

7は、手づくね土器の埴で6よりやや大きく口径6cm、器高4.6cm、器厚0.7cmを測り、胴部がややふくらむ。

8は、手づくね土器の埴で口縁部が変形しているが口径7cm、器高5cm、器厚0.5cmで、平底より胴部は直線的で口縁部は外反する。内面に指圧痕が明瞭に残っている。

9・10は、土師器こしき把手である。

(8) 各グリット出土の遺物

土器 (第24図、図版18) 図示できるものが少なく主なものをあげた。

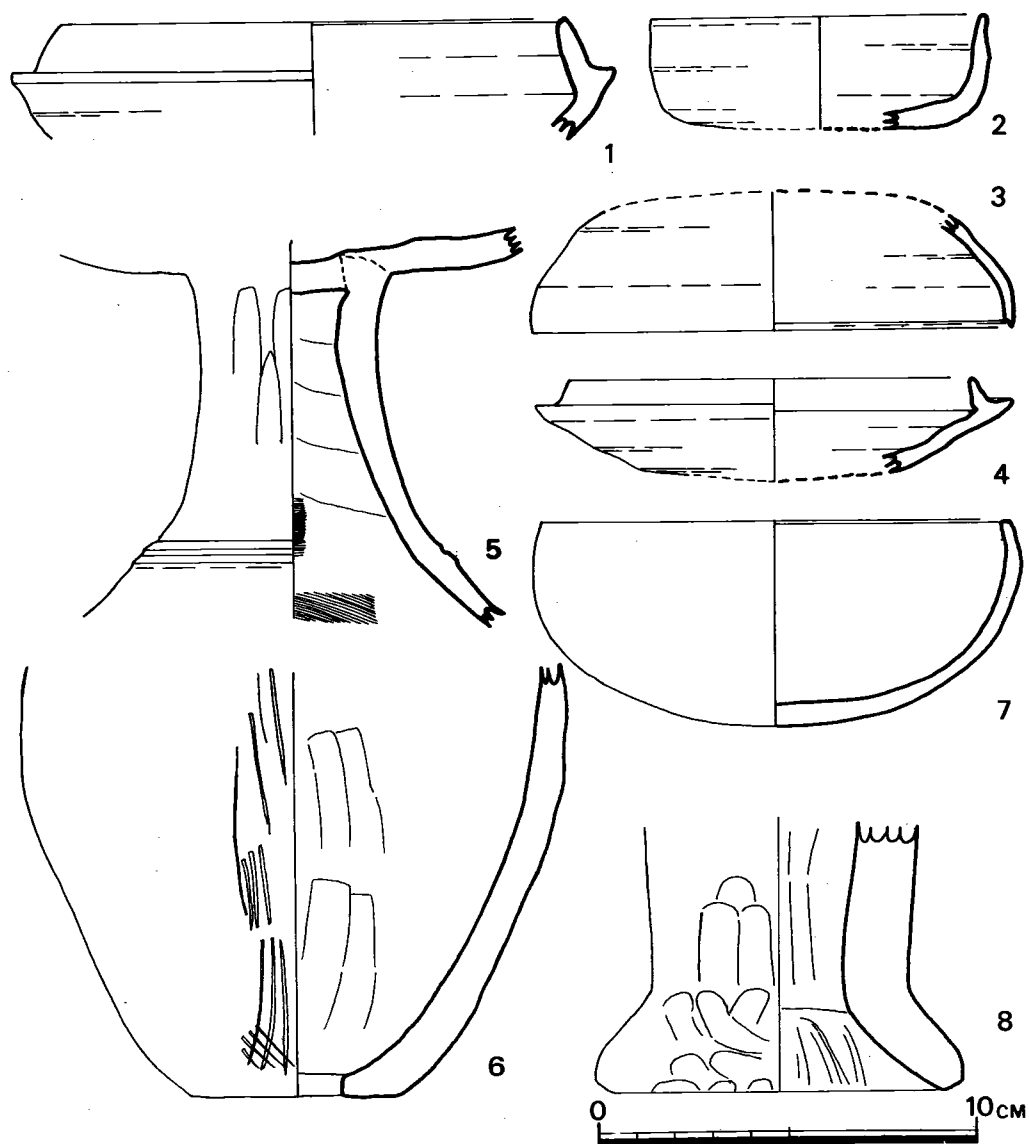
1は、G-7の1層出土の須恵器坏身で底部を欠損している。口径13.3cm、器高約5cmで深く、たちあがり1.4cmで体部より直立的にたちあがり、器肉が厚く口縁端部は平坦であり、受部も太く平坦で先尖がり気味である。色調は青灰色を呈し胎土緻密、焼成良好であり、ナデによる調整をしている。この土器は本遺跡の須恵器では最古のもので第II型式に属する。

2は、X-5表土層出土の須恵器坏身で8号住居跡最上層であるがここで取り扱った。口径8.7cm、器高約3cmで平らな底部より胴部にかけてヘラ削りがなされて、胴部に直立にたちあがり、中ほどにて稜を有して口縁部につづき、口縁端部が外反する。色調は灰色で胎土中に小砂粒を含み、焼成良好である。この土器は第V型式に比定できる。

3は、O-8覆土出土の須恵器坏蓋である。口径12.6cm、器高約3.5cmで天井部を欠損しているが丸味を帯びて直立な口縁部につながり、口縁端部内面に稜をめぐらしている。色調は青灰色を呈し胎土緻密、焼成良好である。第IV型式に属する。

4は、M-10の2層出土の須恵器坏身で口径10.7cm、器高約3cmで底部を欠損している。たちあがり短かく0.6cmで、直線的に内反してたちあがり断面三角形で太い。受部は外開きで太く先端

部は尖がり気味である。色調はやや茶青灰色で胎土中に小粒の白砂を含んでいて、焼成良好である。第IV型式に属する。1～4の須恵器調整はヘラ切りの横ナデを施している。



第24図 大又遺跡グリット出土土器実測図（縮尺2分の1）

5は、R-6の2層出土の高坏で脚裾部と坏部の一部を欠損している。現高11cmで脚下方に一条の段をめぐらして、脚部と坏部の接合が残っている。内外面ともに細かいハケ目が施され、表面脚下方には丹彩の痕跡がうかがわれる。胎土は小石粒を含み、焼成は良好である。

6は、土師器こしきで上半部を欠損しているが、現高11cmで底部の孔は径2.4cmである。内面はヘラ削りで調整し丁寧に仕上げている。表面は櫛目を乱雑に施している。

7は、R-6の1層出土の土師器盃で口径12cm、器高5.5cmであり、内外面を研磨している。色調は桃色で胎土中に小粒の白砂が混入していて、焼成良好である。

8は、U-9の2層出土の器台と推定されるもので現高7cmを測る。

縄文式土器 (第25図、図版19) 6号住居跡付近と8号住居跡付近出土の三片であるが、



接合できる。口径28cmで口縁部はほぼ直立してたちあがり口唇が外反する。底部は丸底になるものであろう。表面にヘラ状の施文具にて口縁部直下に、下方より上方に刺突文(連点文)が一条めぐり、その下1.5cm巾で横方向に1~1.5cmのヘラ状工具の先端で平行する斜横沈線を組

第25図 大又遺跡出土縄文式土器(縮尺2分の1)
み合わせ、さらにその下方に巾1.5cmの右方向よりの刺突文(連点文)が二条施されている。胴部には縦方向にヘラ状工具による沈線が整然と施されている。内面は貝殻条痕文が横方向に施されている。器厚0.8cmで滑石の混入はみない。色調は褐色で胎土中に小白粒砂を含み、焼成良好である。この土器は縄文時代前期の曾畑式土器であり、西北九州沿岸部に多く見ることが出来るタイプである。

石器 (第26図、図版19)

第24図と図版19の縄文式土器を除いたもので、1はサヌカイト製の石匙で横型である。つまみに対して刃部がほぼ直角になるように作られていて、つまみに刃部の間が挟り込まれ、刃部の左右が三日月状に曲線的で、両面より剥離を施し、先端が極めて鋭利になるものである。

2は、サヌカイト製の庖丁型石器で片刃面のみわたり細かく剥離を行なって刃部を作り出している。片面は剥離されないままの未調整である。大きさは巾8cm、長さ8cm、厚さ0.8cmを測る。

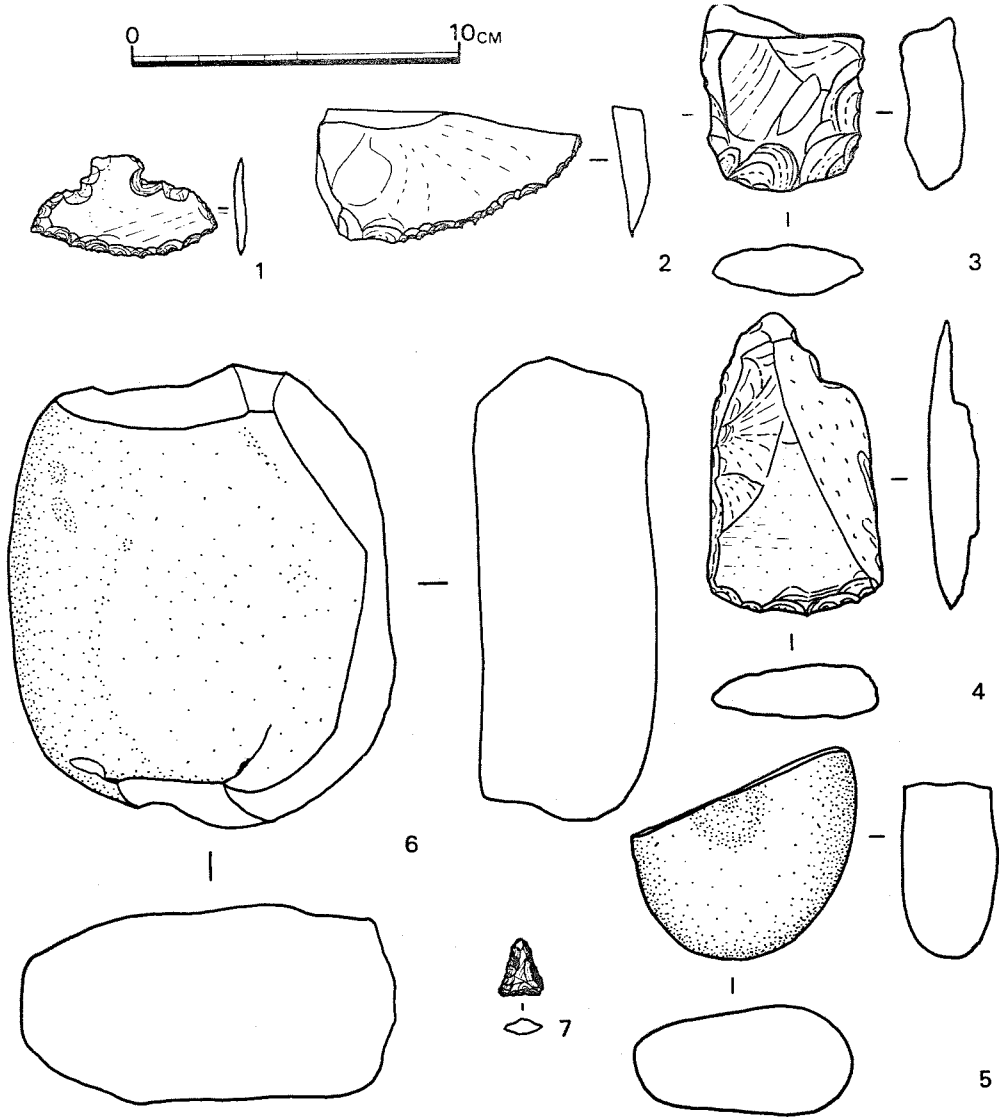
3は、M-11区1層出土の打製石斧で安山岩製の半截品で短冊形である。両面ともに粗い敲打で、刃部は丸味を帯びかなり自然面を残して風化度が高い。

4は、Q-8区堅穴状遺構の祭祀遺構下に存在していたもので、安山岩製の短冊形を呈し頭部を欠損している。両面ともに自然面を残して正面中央部には局部磨製を施し、刃部は両

面より鋭利に剝離が施され直線状をなす。

6は、表採の砂岩質の磨石で完形品ではない。両面ともに粗い調整が施されていて使用による滑らかさはない。

7は、表採の黒曜石製の石鏃で浅い抉りがある。



第26図 大又遺跡出土石器実測図

3. 結 び

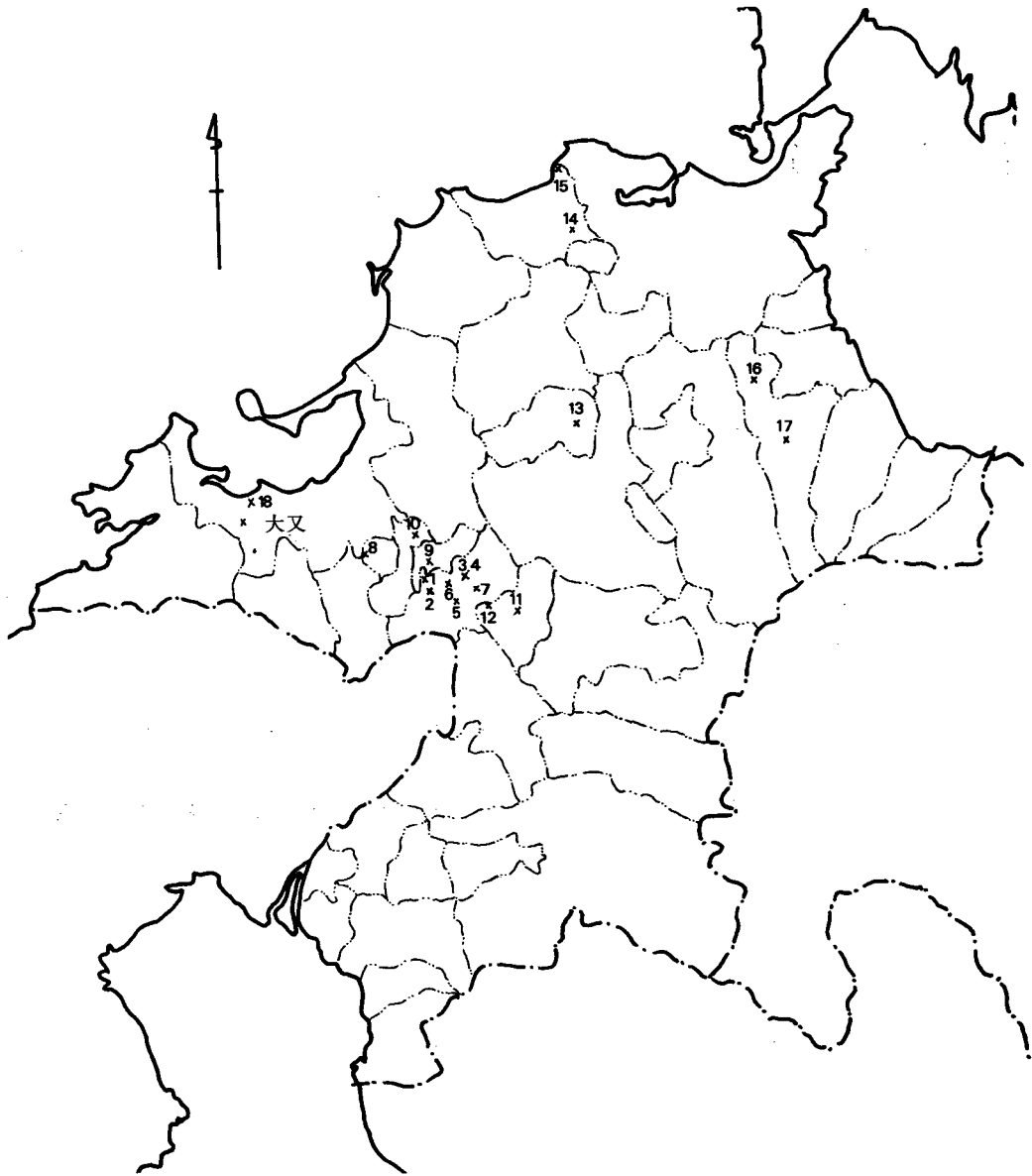
本遺跡は2回の発掘により弥生時代後期の住居跡1基、古墳時代後期の住居跡6基、土塚1基を検出した。遺物の主体をなすものは土師器、須恵器、近世陶磁器、若干の弥生式土器と3片(同一個体)の縄文式土器が出土し、石器も若干発見されている。特殊な遺物としては、祭祀遺物である土製鏡5個と土製六鈴鏡1個及び手づくね土器3個の出土は特異なものである。以下これらを踏まえながら予備調査を含めて結びとしたい。

九州において古墳時代の集落跡は近年の開発ブームによる埋蔵文化財調査に伴ない類例が多く発見されている。しかし開発に伴なう発掘調査は意図的には行なわれなく集落全体を把握する調査はなされていないのが現状であり、大又遺跡もこの例に漏れないものである。

さて、大又遺跡は長さ100m、幅20~30mと非常に狭い低台地上に営まれたもので、古墳時代後期の6基の住居跡を検出した。各々の住居跡は重複している事実を踏まえるに、当時においては実際に3~4基の住居跡が同時に存在し、集落内における共同体を形成していたと推測される。住居跡各々の検出状態や出土遺物からすると3号・4号・5号が、また1号・2号・6号・8号が同時存在として考えられ、これらは須恵器編年第Ⅱ型式(6世紀前半)と第Ⅲ型式(6世紀中葉)を主体とするものであると考えて間違いない。住居跡の位置関係をみると8号住居跡は台地中央部端にあるが、その他はいずれも台地基部近くの東方に集中して位置している。

竪穴住居跡は古い方は方形で、4号には張出し部が付属するが、新しい方では長方形が現われる。大きさは4m×4mが平均的で、切妻様式の建築形態と推測されよう。本遺跡の住居跡は焼土を所有しているものと、全くその痕跡を有しないものがあるが、土師器こしきの把手が出土している竪穴も在る。北九州の場合住居付帯施設としてのカマドは福岡県教育委員会発掘の類例よりすると須恵器第Ⅱ型式にカマドが構築されるものとなないものが在り、現在のところ、第Ⅱ型式を持ってカマド出現時期と見ることができるようであるが、この大又遺跡では出現をみない。明白に炉跡と確認されるものは2号・4号住居跡で、3号・8号住居跡は拳大の川原石の周囲に焼土がみられ、石自体も火をうけたと推測されて赤く焼けた痕跡がうかがわれ、炉跡として使用されていたものであろう。周溝やいわゆる貯蔵穴や出入口等は検出されていない。なお、1号住居跡の壁高は50~60cmであり、これらは時々類例を見るものである。さらに祭祀遺物を出土した竪穴状遺構が各々の住居跡よりやや離れて存在する。この遺構は祭祀ゆえにこのようにはっきりと形態を示さないものであろう。

祭祀遺物についてであるが、九州において土製鏡の出土した遺跡は少なく、現在24ヶ所で福岡県は第27図の通りであり、佐賀県2ヶ所、熊本県3ヶ所、鹿児島県3ヶ所でその他は総て福岡県内に分布している。



第27図 福岡県内の土製鏡分布地図

	遺 跡 名	所 在 地	伴 出 遺 物	文 献
1	山 の 谷 遺 跡	筑紫野市杉塚	滑石製有孔円板1手づくね土器 (須恵IV)	2、7
2	鷺 田 山 東 遺 跡	筑紫野市武蔵 鷺田山東麓	(奈 良)	7
3	大 曲 り 2 号 住 居 跡	筑紫野市針摺569	手づくね土器、須恵器(IV)、土師器	3、7
4	大 曲 り 遺 跡	"		3、7
5	野 黒 坂 遺 跡	筑紫野市針摺字野黒坂	(須恵ⅢA)	4、7
6	ご こ く 山 古 墳	筑紫野市紫	土製勾玉、高坏	
7	長 道 遺 跡	筑紫野市山家	土製勾玉3、丸玉3、手づくね土器 3	1、7
8	大 塚 古 墳	春日市下白水	土製人形2、土獣2、土製勾玉、手 づくね土器	5、7

9	太宰府不丁遺跡	筑紫郡太宰府町不丁		7
10	裏の田18号住居跡	筑紫郡太宰府町水城	手づくね土器	
11	八並遺跡	朝倉郡夜須町	須恵器(Ⅲ)	7
12	松延池畔遺跡	朝倉郡夜須町松延	土製勾玉、丸玉、臼形製品	
13	川島嘉麻川川底	飯塚市川島・嘉麻川川底	手づくね土器	実査
14	立屋敷遠賀川川底	遠賀郡水巻町立屋敷		7
15	夏井ヶ浜遺跡	遠賀郡芦屋町山鹿字夏井ヶ浜	土製丸玉、手づくね土器5	6、7
16	一の塚古墳	京都郡勝山町	土製勾玉3、丸玉33、土師器	7
17	犀川小学校西側遺跡	京都郡犀川町	土製丸玉、算盤玉2、土製リング	7
18	下山門遺跡	福岡市西区下山門	土製丸玉、滑石製有孔円板、白玉他	

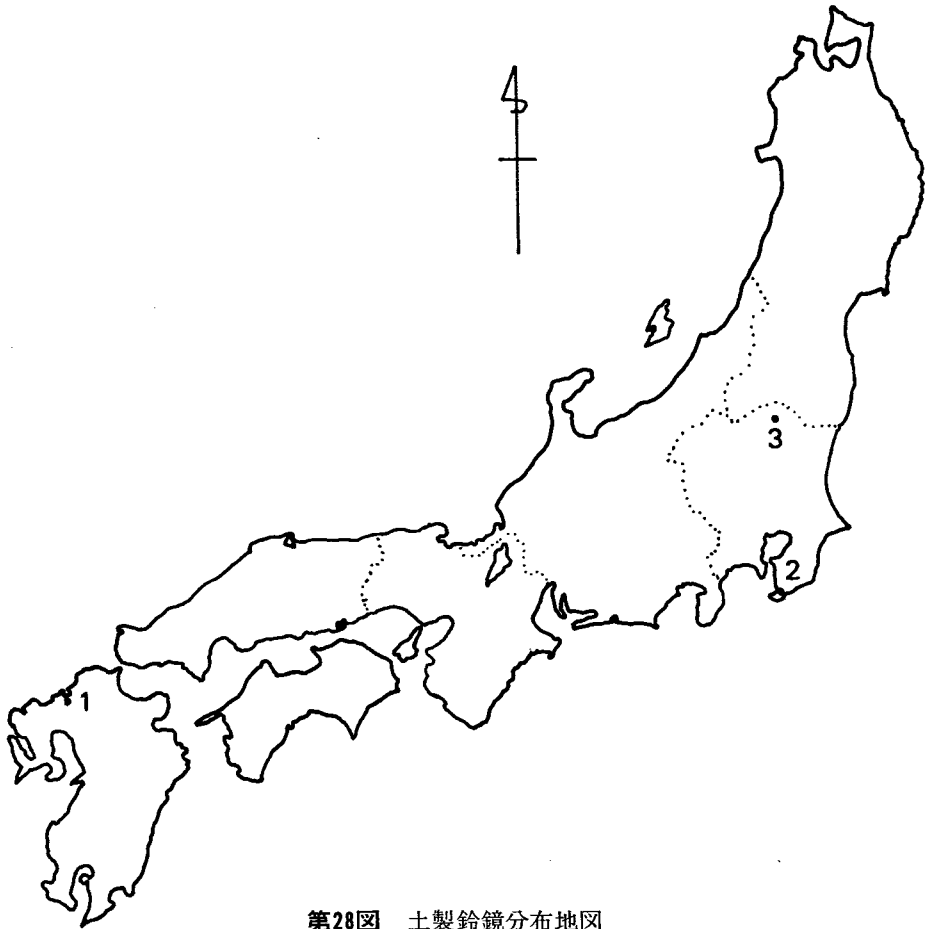
文献 1. 九州考古学会編（『北九州古文化図鑑』第二輯）1951年（昭和26年）

- 文化財愛護議員連盟発行「杉塚山の谷遺跡」（『福岡県文化財愛護ニュース』第2号）1969年（昭和44年）7月
- 伊藤玄三他「大曲り遺跡」（『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集）1970年（昭和45年）3月（本文中には手づくね土器）
- 松岡史・前川威洋他「野黒坂遺跡」（『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集）1970年（昭和45年）3月
- 大場磐雄『祭祀遺跡』1971年（昭和46年）12月
- 芦屋町誌編纂委員会（鈴木基親）「原始時代」『芦屋町誌』1972年（昭和47年）3月
- 小田富士雄「九州」（『神道考古学講座』第2巻原始神道期1）1972年（昭和47年）6月

1は副島邦弘氏ご教示。6・12は赤崎敏男氏ご教示。10は酒井仁夫氏ご教示。14・15は黒野肇氏・中村修氏ご教示。18は福岡市立歴史資料館展示。

古墳時代の祭祀遺跡は、1自然神を対象（山岳・巖石・島嶼・沼・池泉）、2古社の境内ならびに関係地、3住居跡付属地、4古墳付属地、5単独遺物発見地と五種類に分けられている。これらの遺跡より祭祀遺物として滑石製品や土製品の模造品が出土している。土製祭祀遺物の内には粗造人形土器・壺・高坏・盃・甑・釜等と模造品の鏡（円板・玉類・勾玉・丸玉・棗玉・管玉）家什（臼・杵・案・柄杓・杓・箕）武器（弓）動物（人・猪・鶏・魚・貝）菓子、その他（鈴・円盤・棒状品等）があり大又遺跡より鏡（六鈴鏡を含む）、粗造人形土器の範疇に入る手づくね土器の出土をみていて、それは前述の3一住居跡付属地に付帯しており、集落内の祭祀としてうかがわれる。

土製鏡は現在のところ、鈕によって三種類に分類できる。（Ⅰ）は六鈴鏡にみられるように鈕に孔を穿けたタイプ。（Ⅱ）は大又遺跡出土の鏡にみられるように指頭でつまみあげて鈕をたちあがらせるタイプ。（Ⅲ）は横巾が広く厚みが薄い粘土帯をドーム状に縁から縁にかけて鈕としたもので、大又遺跡からの六鈴鏡は（Ⅰ）に、その他の鏡は（Ⅱ）に属する。土製六鈴



第28図 土製鈴鏡分布地図

鏡は現在大又遺跡を含め第28図の三ヶ所より出土している。

1. 大又遺跡 福岡県福岡市西区拾六町 六鈴鏡1 (須恵器第Ⅱ形式共伴?) 同集落内より土製鏡5 手づくね土器3出土。
2. つとるば遺跡 千葉県館山市沼 土製模造品(四鈴鏡1、五鈴鏡1、七鈴鏡1、鏡2、有孔円板50、勾玉3、管玉、平玉1、丸玉83、鐸3、鈴釧1、その他)、土師器(坏8)、手づくね土器64。
文献 椛山林継「関東」(『神道考古学講座』第2巻原始神道期1)1972年(昭和47年)6月
3. 上長井遺跡 栃木県矢板市長井字上長井 六鈴鏡1。
文献 大和久震平・塙静夫「古墳文化」『栃木県の考古学』1972年(昭和47年)6月

大又遺跡における祭祀形態を推測すると、周辺の高崎1号から6号墳とは無関係にあると思

われ、集落内の祭祀であり共同体における生産を意味する農耕行事あるいは狩猟・漁撈やその他種々のお祭の際に用いられたと思われるが、この背景には「海」が重要な意味を有していたと考えられる。

大又遺跡存在の背景にあるものは何であろうか。今回も前回の予備調査の際に出土した鉄滓が多少出土したが、明らかに工房跡として把握できる竪穴はなく製鉄跡と断定はできない。また大又遺跡よりの出土遺物には海に近いにもかかわらず漁撈に関係する遺物の出土しないことで、土・石錘等は1点も出土していない。しかし祭祀遺物の出土はこの遺跡を把握する場合、これが大きく暗示を与えているように思えてならない。高崎1号～5号墳との関係については有機的関連性が把握できる可能性が存在するというにとどめる。

土製鏡に関しては、東京国立博物館考古課の亀井正道氏、栃木県氏家町文化財保護委員の長島元重氏、国学院大学学生の赤崎敏男氏の御世話になったことを記して謝意を表わす。

「3 結び」の項には大場磐雄博士の論文を参照した。

第 4 おわりに

高崎古墳群、大又遺跡の報告を終了するにあたり、若干の反省と感想を記したい。今宿バイパス路線計画地内の発掘調査の場合、まず予備調査を行なって、重要な埋蔵文化財（ここでは、文化財に価値観を持ち込むことになるのだが）については路線が変更できることになっていた。現に、若八幡古墳は残されることに決定している。

しかし、私達（行政側の文化財を守る立場）は結果的には高崎古墳群を全滅させたともいえる路線決定を行なわせてしまった。高崎2号墳の場合、私達は残せるものと思っていたし、宮ノ前E地点遺跡の場合も、本調査が出来るものと考えていた。しかるに、2つの遺跡とも土取り作業により跡形もなく消滅させてしまった。この事実を反省するときに、

1. 私達自身の発掘現場などでの日常の普及事業をもっと重要と考え、地域の住民と文化財との結びつきを強める努力をもっとしなければならない。
2. 完全な分布調査に基づき、予備調査・本調査を通じて残せるものを出来るだけ多く残す努力を常にしなければならない。

などの点に気がつく。

しかし、大きな問題点の所在は、別のところにあるように思われる。今日、福岡市大字拾六町周辺の景観は日に日に変わりつつある。山は削られ、田は埋められ、どんどん新しい住宅が建ち、バイパスの建設も始まった。

またこの地での開発の多くは、小規模の宅造であり、受益者負担の形で文化財を処理することは出来ない。このようななかでも、文化財を残す意義がバイパス建設や宅地造成の持つ意義に劣るとは思わないが、すくなくとも説得力の点で迫りに欠ける。

行くつくところは、地域の住民の善意でしか文化財は守り得ないような気にもなってしまう。

しかし、この地域の人々にとっても、これから居住しようとする人々にとっても、いや文化財の持つ意義を認め守ろうとする人々にとって、共通の問題は、きちんと整備された都市計画こそ必要と思われるのである。これがないかぎり、すべての問題が処理出来ないのではなからうか。

異常なまでの建設ブームと農業の荒廃が進行しつつあるとき、文化財を守る行政側の一員としていっそうのきびしさを感じるのは、私達だけではあるまい。

圖 版

PLATES



1 高崎5号墳発掘前全景(東南から)



2 高崎5号墳の立地する小丘陵(東から)



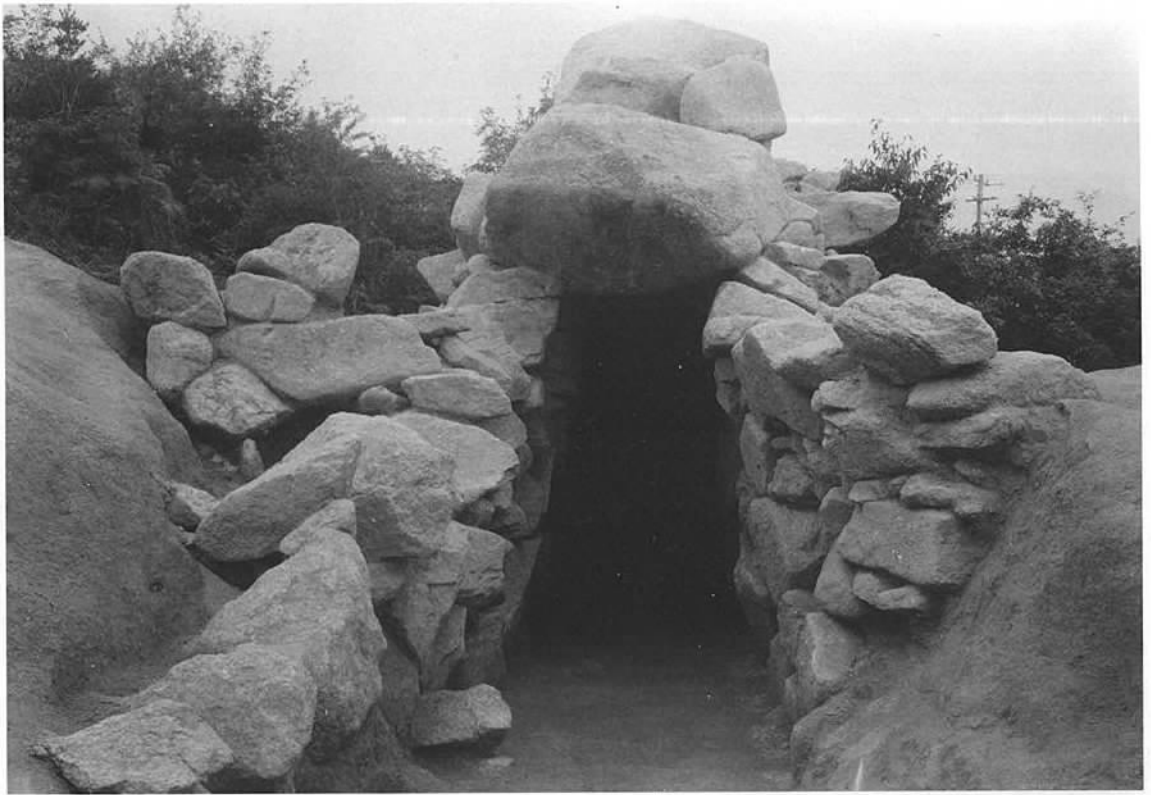
1 高崎5号墳 封土と石室(北東から)



2 高崎5号墳 封土と石室(東南から)

右、高崎5号墳 遺物の出土状況
下、高崎5号墳 羨道部の調査





右、高崎5号墳 石室奥壁の石組
上、高崎5号墳 石室前面の石組



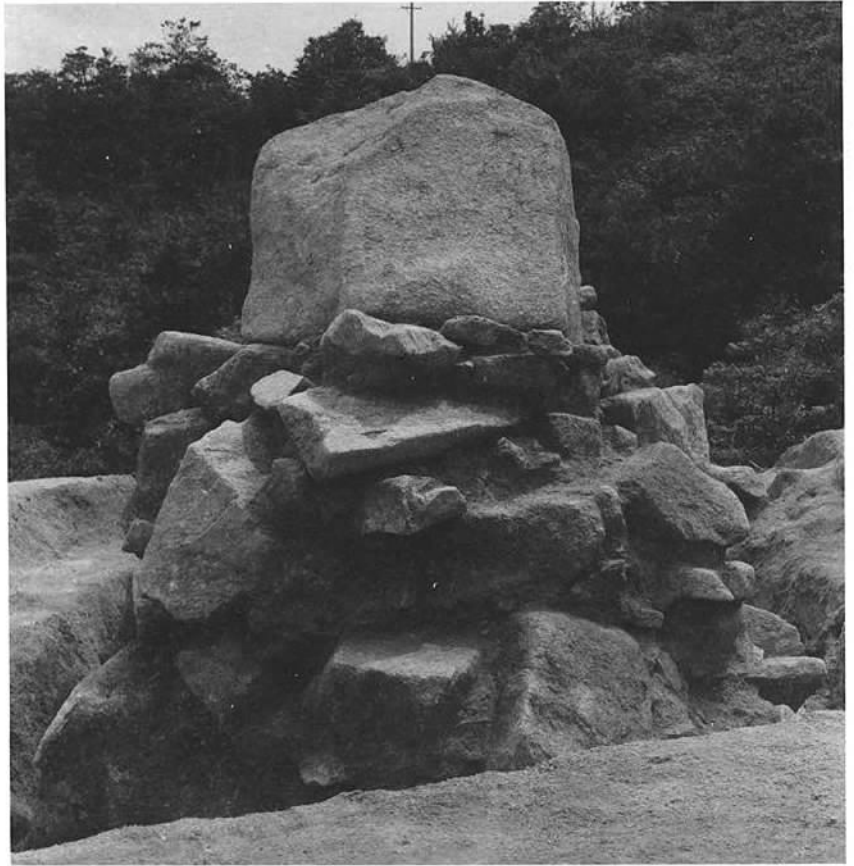


1 高崎5号墳 石室左壁外側の石組(西南から)



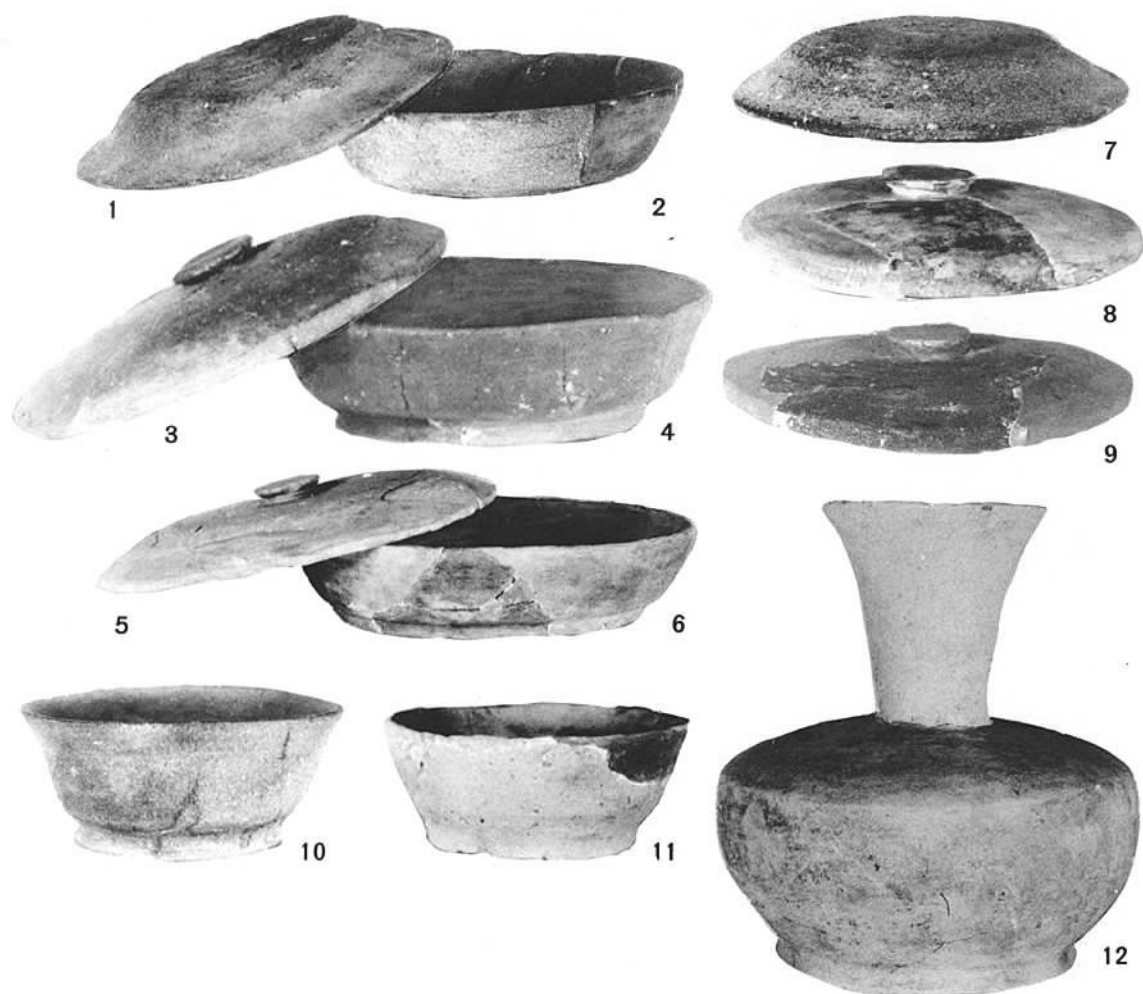
2 高崎5号墳 石室右壁外側の石組(東北から)

右、高崎5号墳 奥壁外側の石組
下、高崎5号墳 石室掘方と石室石組

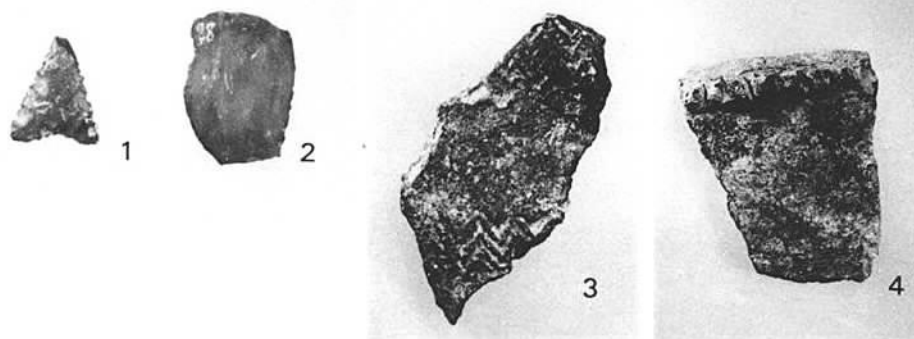




高崎5号墳 出土土器その1



1 高崎5号墳 出土土器その2



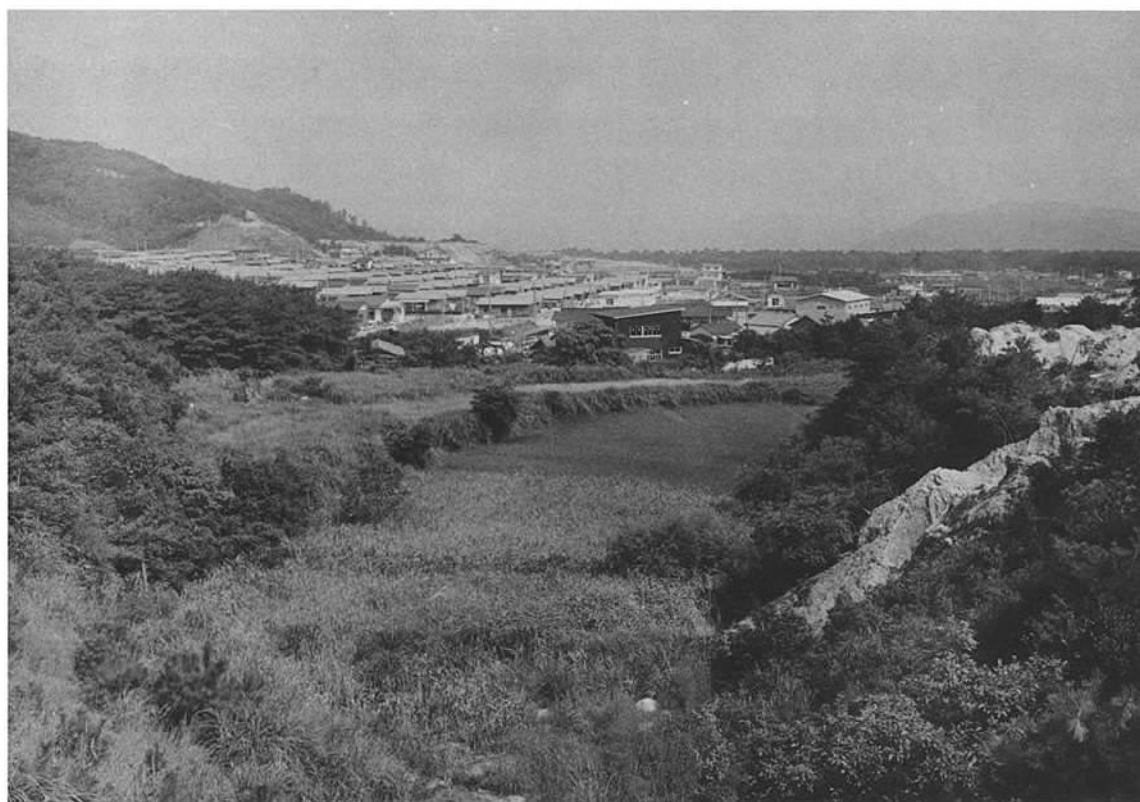
2 高崎5号墳 封土中より出土の石器と縄文式土器



1 高崎6号古墳全景



2 高崎6号古墳主体部の状況



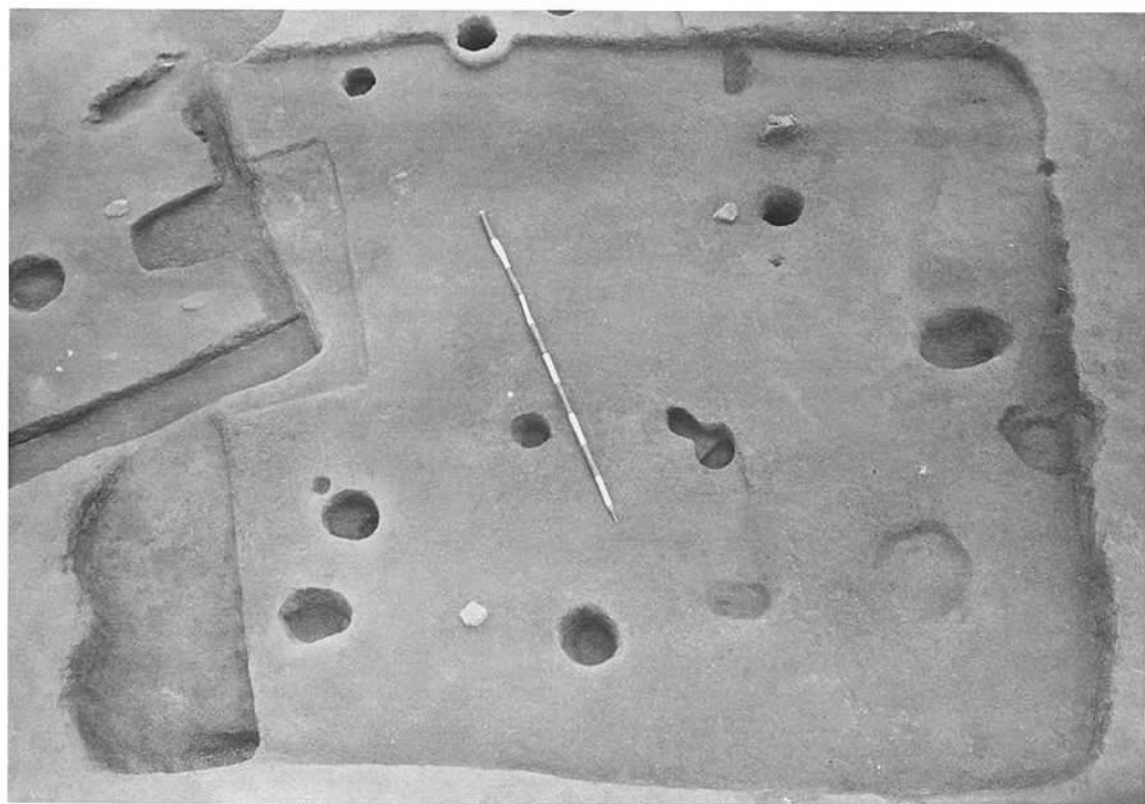
1 大又遺跡近景(右後方は能古島)



2 大又遺跡発掘状態



1 大又遺跡住居跡群



2 大又遺跡 3号住居跡



1 大又遺跡 5号・6号住居跡



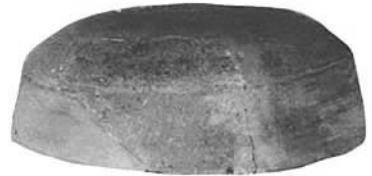
2 大又遺跡 4号住居跡内土器出土状況



1



3



4



5



6



2



1



2

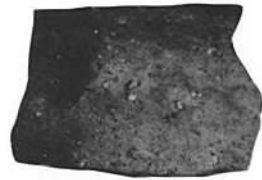
大又遺跡 4号(上1~6)・6号(下1~2) 住居跡出土土器



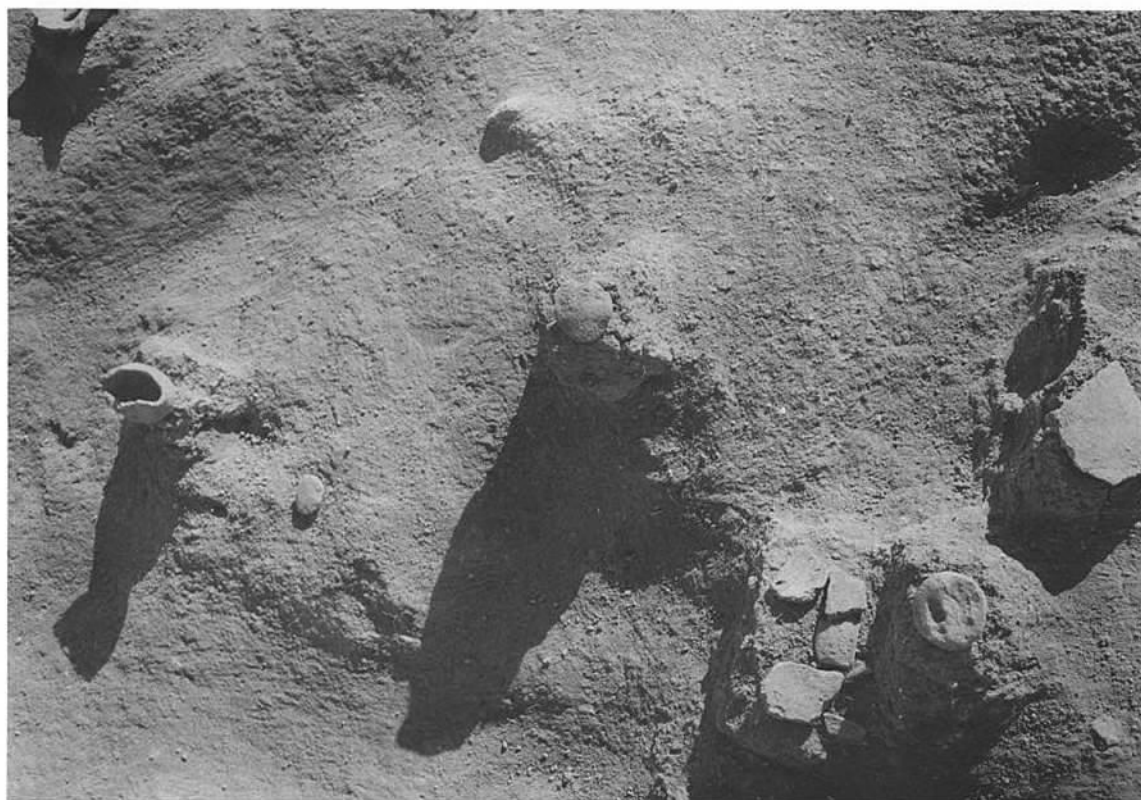
1 大又遺跡 7号・8号住居跡



2 祭祀遺物出土の豎穴状遺構と高崎6号古墳



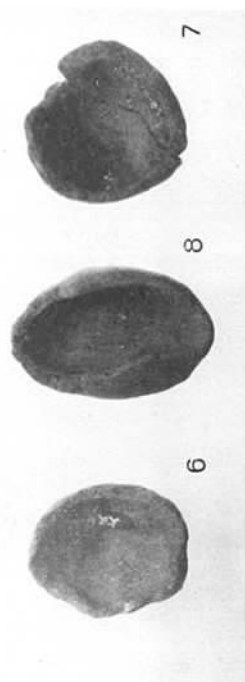
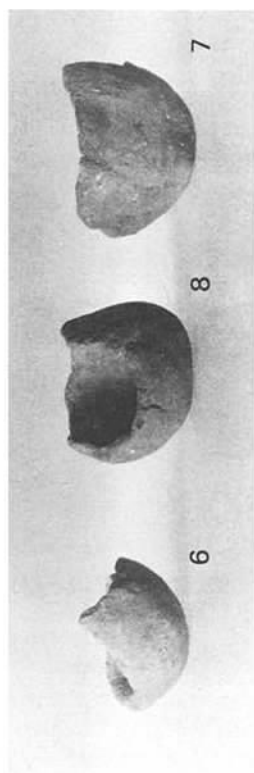
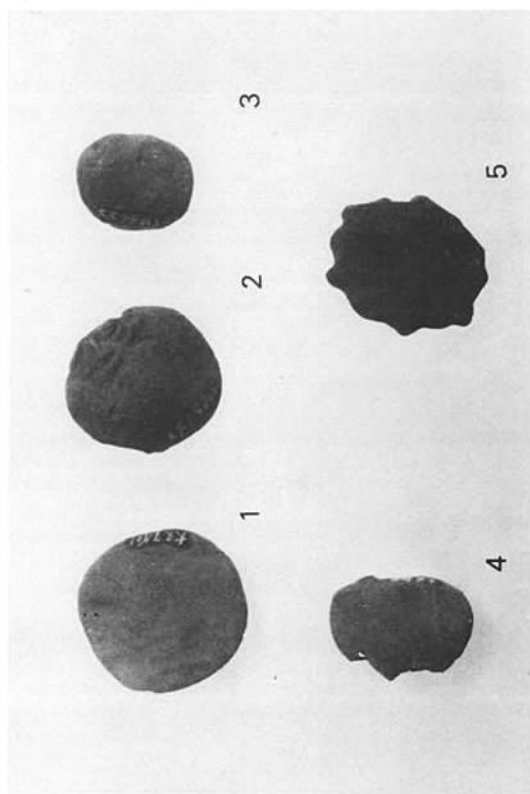
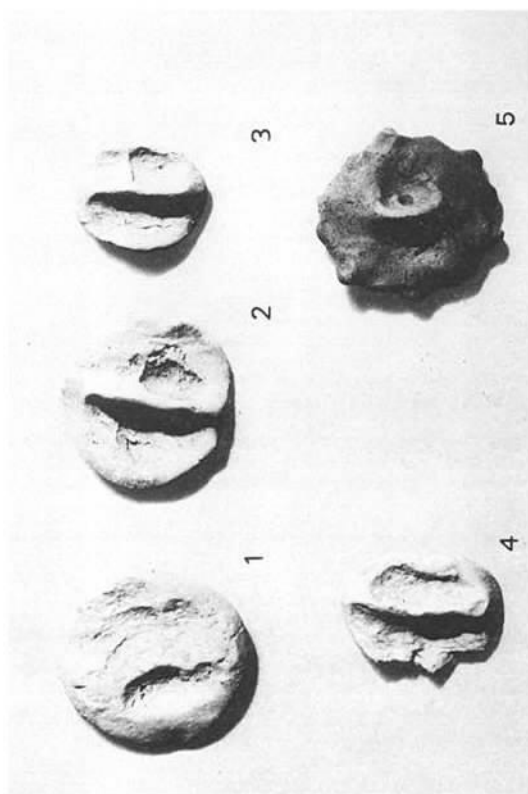
大又遺跡 7号(上2段)・8号(中段1~2) 住居跡出土土器と土壇出土土器(下二段)



1 祭祀遺物出土状況



2 土 坑



大又遺跡出土 祭祀遺物(土製模造鏡、手づくね土器、こしき把手)



5



2



3



6



4

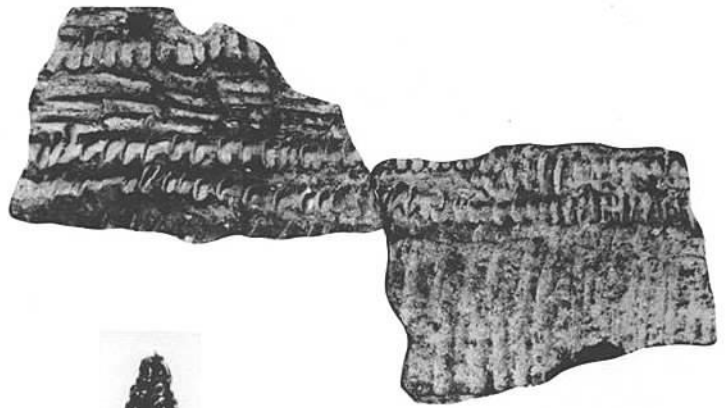
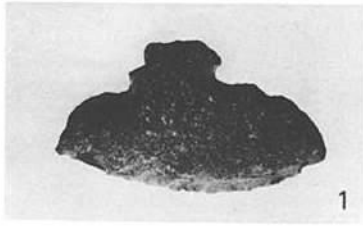


7



8

大又遺跡 各グリット出土土器



大又遺跡出土 縄文式土器と石器

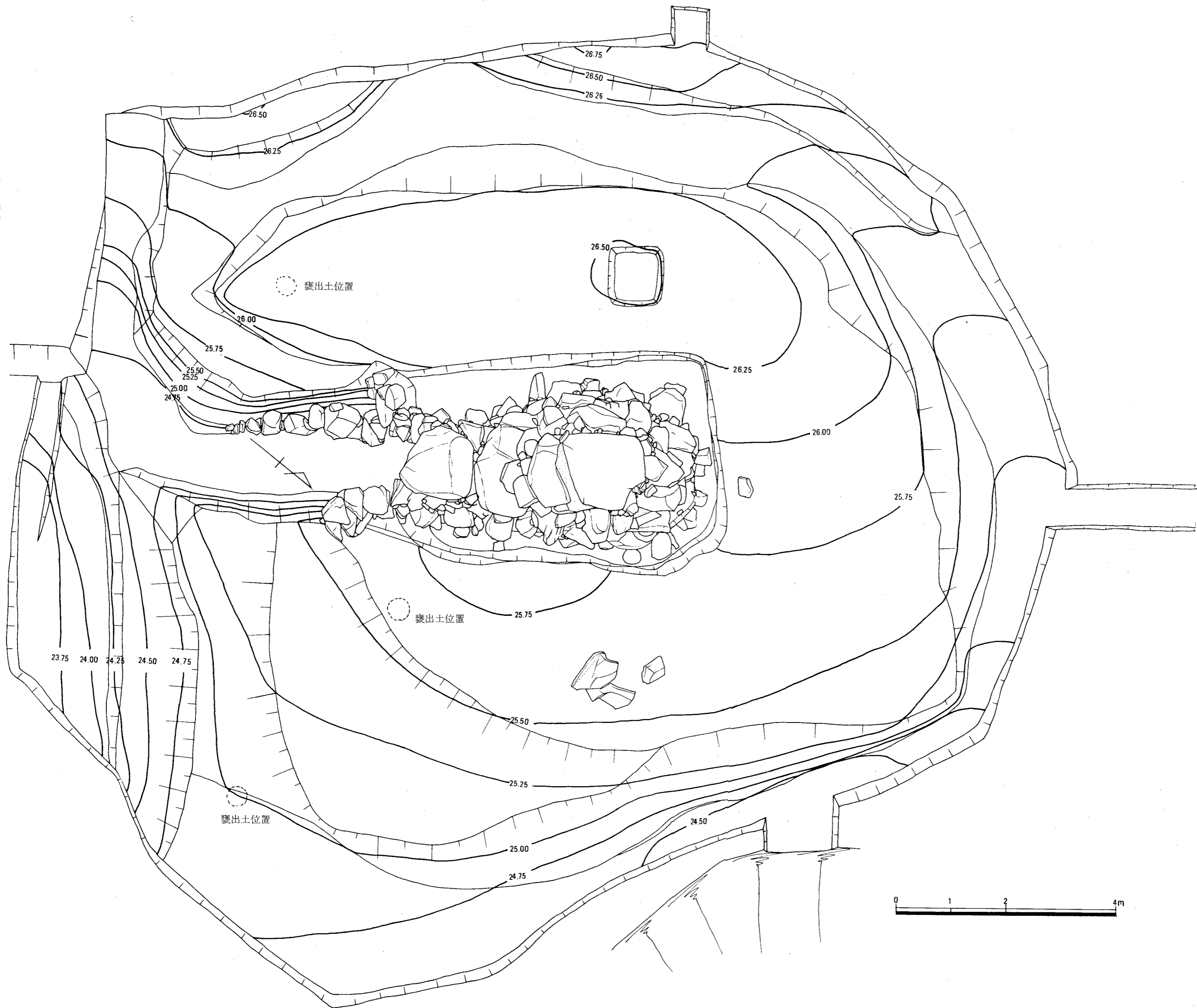
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告

一第 3 集一

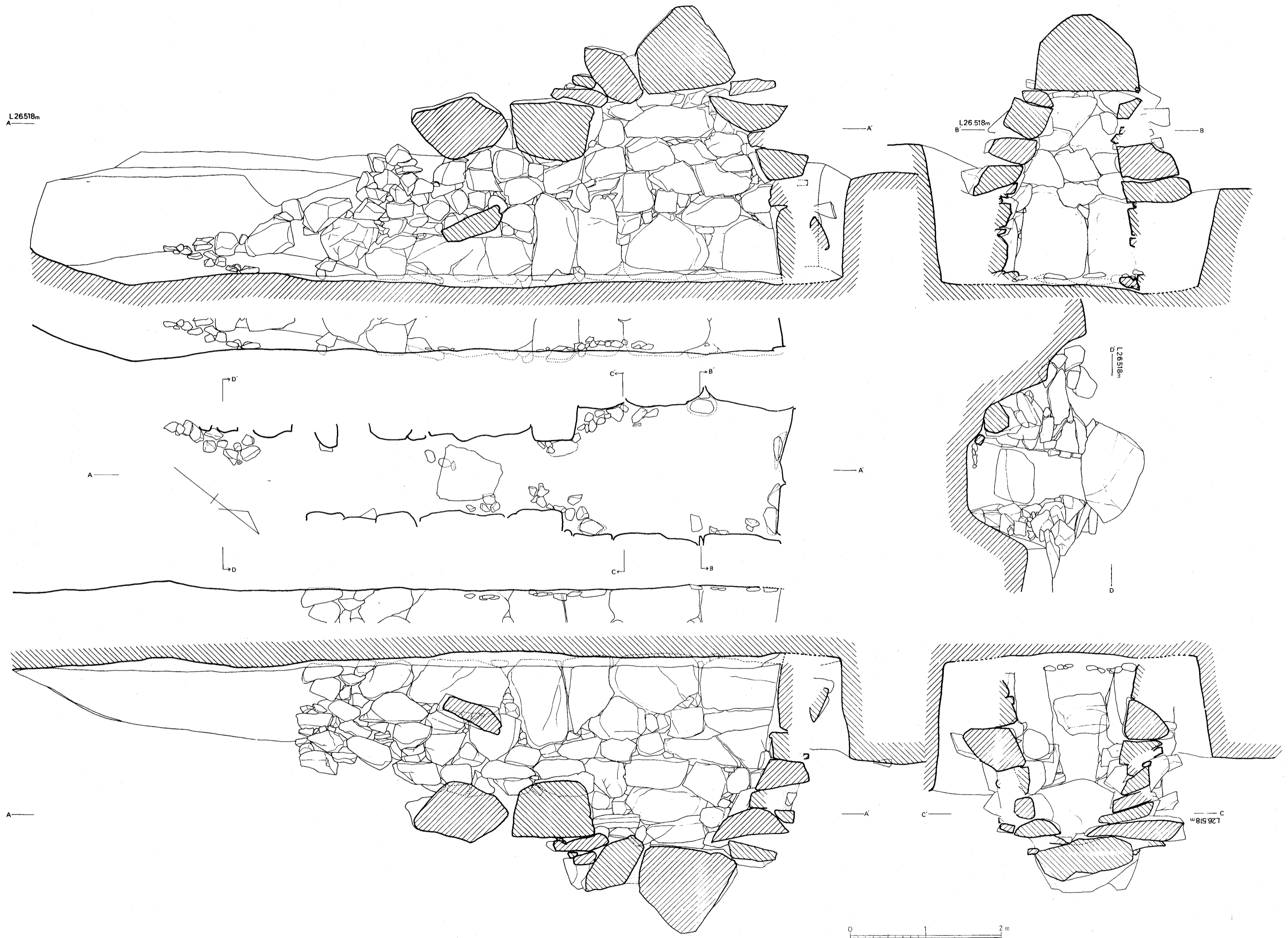
昭和48年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6 街区29号

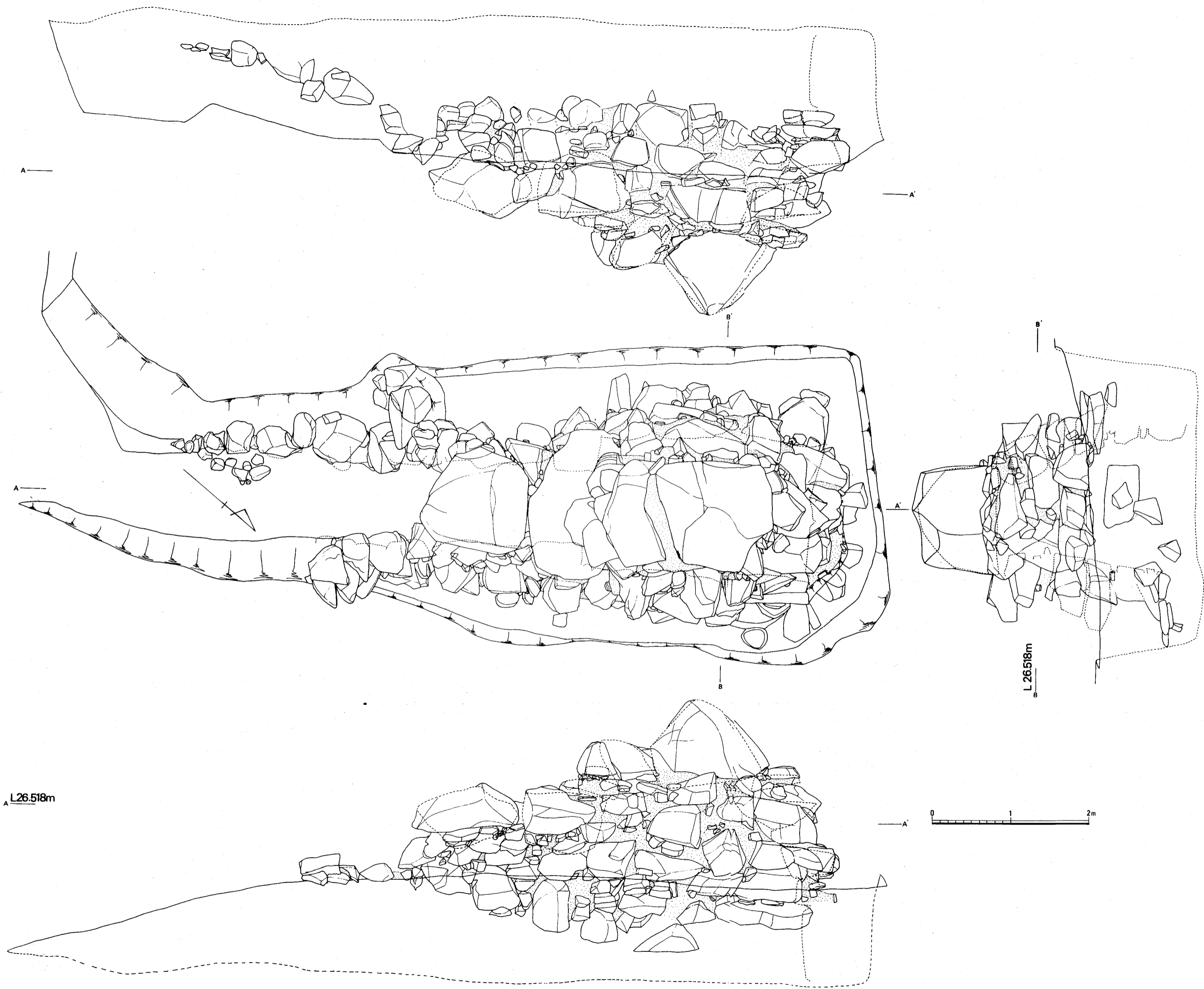
印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市中央区舞鶴一丁目 5 番 6 号



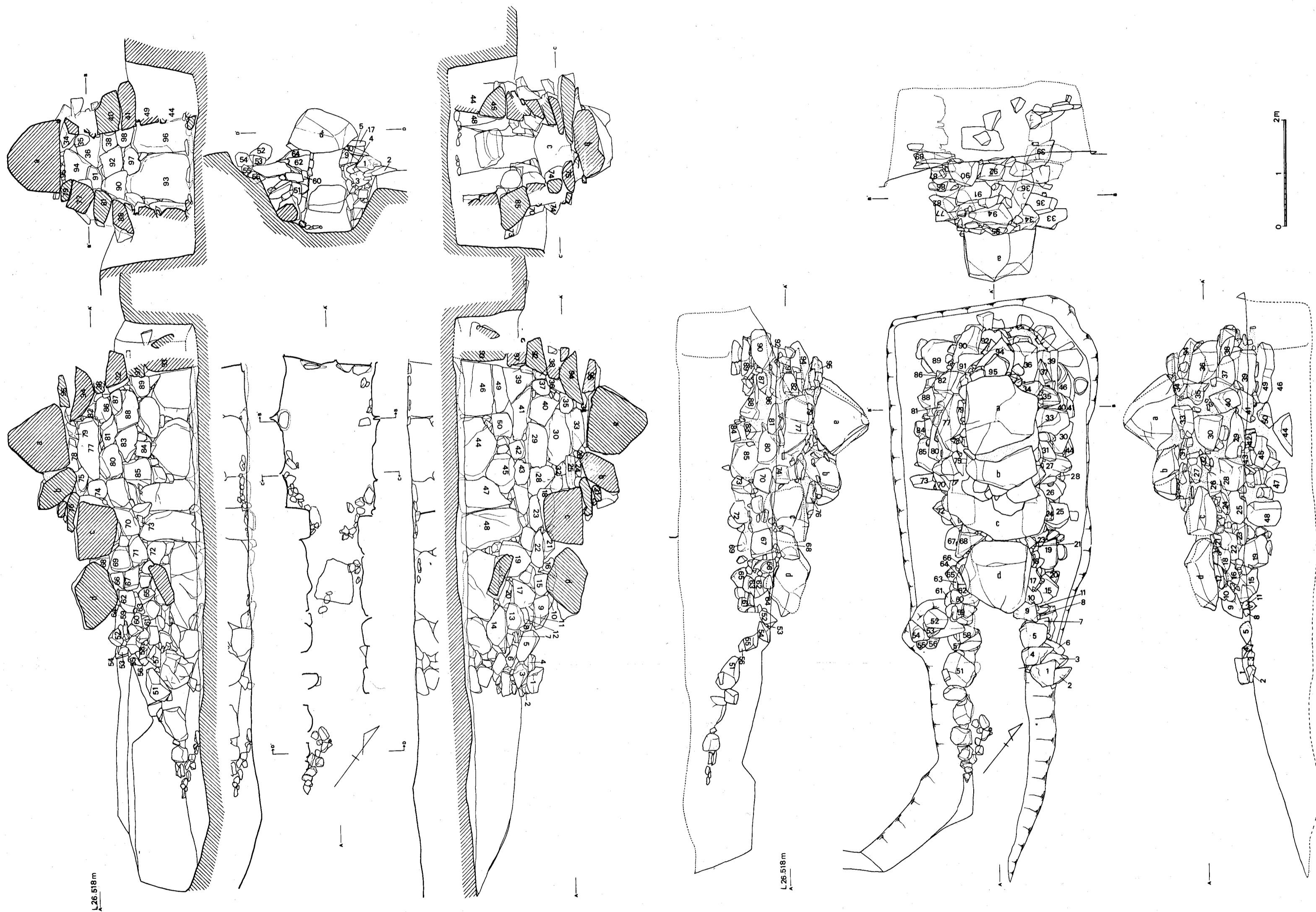
付図1図 高崎5号墳封土排除後の平面図(縮尺60分の1)



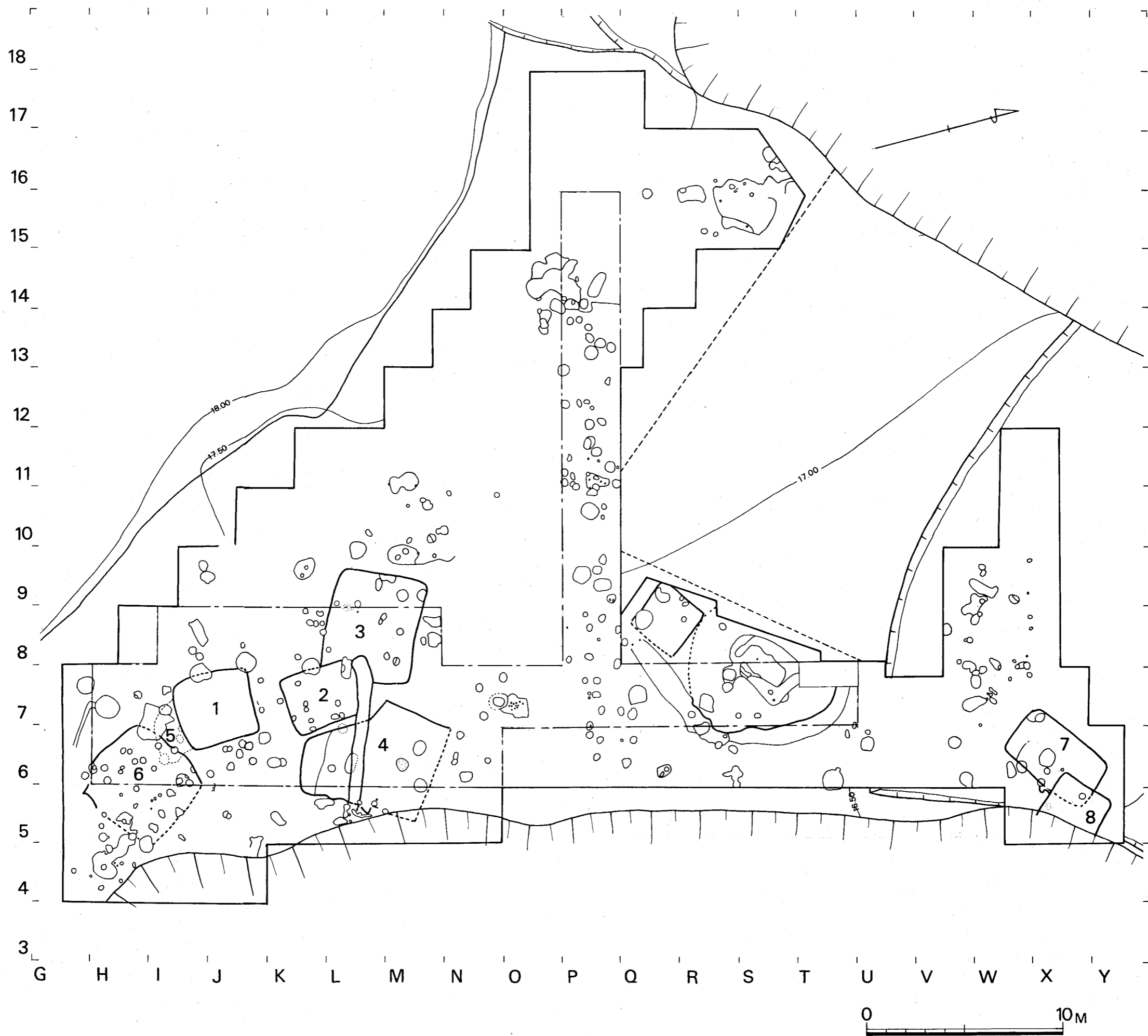
付図2図 高崎5号墳石室実測図(縮尺40分の1)



付図3図 高崎5号墳石室外側石組実測図(縮尺40分の1)



付図4図 高崎5号墳石室石材对照番号図(縮尺60分の1)



付図5図 大又遺跡遺構配置図(縮尺200分の1)